キョーハク少女

ヒロセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キョーハク少女

【Ｎコード】
Ｎ８７２２Ｘ

【作者名】
ヒロセ

【あらすじ】
佐藤優大（さとうゆうた）は普通の高校生。特に変わったところのない普通の、それでいて少しさみしい毎日を過ごしていた。そんな優大の楽しみは幼いころ遊んだ山へ行くこと。その日もただ単に暇だったので山へ遊びに行っただけだった。しかしそこで妙な人間に出会ってしまう。それがきっかけで優大の脅迫（される）生活が始まってしまった。ある意味幸せ。

僕と秘密基地と変質者

突然だけど、僕は親友がいない。
友達呼べる人はいると思う。
親友の定義はよく知らないけど、心の底から信用できる友達はいないし、暇だったら一緒に遊ぶような仲のいい友達もいない。そもそも友達と思っている人も厳密に言えば友達ではないのかもしれない。でもそう考えたら悲しくなるから厳密に言わない。
暇な時に一緒に遊ぶ友達がいないと言ったけど、当然日曜日に遊ぶ友達もいないので毎日が暇だったりする。時々、極稀にお声がかかることもあるけれど、大抵の休日は一人家でパソコンと向かい合っている。ニヤニヤ動画はいつみても暇しないなぁ。でもニヤニヤ動画だけを見て休日が終わっているととても虚しい気持ちになる。でもしょうがないよね。
お姉ちゃんと弟がいるが二人とも忙しそうに遊びに出ている。
僕だけ一人、家にいる。
今日も一人だ。寂しいなぁ。
だからそんな時、僕は山へ行く。
何故かと言えば、山は楽しいから。
山には、親友はいないけど親友との思い出ならある。
子供のころに作った秘密基地。
何にも考えないで遊べていた小学生時代。
友達三人で山に秘密基地を作った。その友達も中学校に上がったら突然疎遠になってしまった。同じ中学校なのに疎遠って不思議。多分、僕が悪いのだと思う。
まあそんなこともういいや。終わったことだしね。とにもかくにも、そう言うわけで僕は山に行った。
家からそう遠くない山。
誰もいない、思い出だけが生きる山。

僕は秘密基地へ向かって山を登った。
少し歩いて山の中腹あたり。標高がそれほど高くない山なので山登りの時間は少し。だけど木が多く雑草も茂っているので足場が悪くて普通には登れない。でも楽しみが先に待っている僕としては全然苦ではない。
僕はすぐに秘密基地にたどり着いた。
基地って言ってもそんなに大層なものではない。ただ木の棒を地面に突き刺してそこにビニールシートをかけただけの簡素な秘密基地。秘密基地と言うより秘密テント。でもあのころの僕らにとっては自分の家よりも居心地のいいところだった。
思い出が詰まった大切なところ。
僕はそれが風化しないように大切に守ってきた。
いつ行っても秘密基地は変わらずに僕を迎えてくれた。
目を瞑ればあのころの笑い声が聞こえてきそうな気がする。でも気のせいだった。
あの日を留めたままの秘密基地。眺める度にとってもノスタルジー。
……でも、今日は少し様子が違った。
秘密基地は壊れていない。いつもの通り汚いままだ。いつもと違うのは、その周り。秘密基地の周辺の地面に妙なものを見つけてしまった。
足跡が、あった。
秘密基地を探るようにぐるぐると足跡がついていた。
正直、怖い。
なんでこんなところに来ているのだろう。この付近に変わった物なんてないのに……。
僕は恐怖に駆られながらも、秘密基地を守るために足跡をたどって行った。

足跡は山の奥深くへ進んでいた。
出来るだけ音を立てずに足跡を追う。
でもすぐに見失った。土から草むらに地面が変わっていた。
見失いはしたが土の上の足跡はまっすぐ進んでいたので、僕は足跡の方向に真っ直ぐ森を進んだ。
そして僕は人を見つけた。
多分、女の人だ。
草の生えていない土が見えているスペースに一人立っているその人は、山に似つかわしくない格好をしていた。
黒いミニスカートから伸びる白くて長い脚。足元はミュールを履いており、よくそれで山が登れたなぁと感心してしまう。上半身はノースリーブシャツにネクタイをつけたこれまた山登りには似合わない格好。露出が多くて虫に刺されちゃうよ。真っ白で綺麗な肌なんだから虫なんかに刺されたらダメだと思います。
周りを囲む大自然とその人の格好はとてもミスマッチだったが、それ以上にその人のモデル体型が山と不釣り合いだった。
しかし。
ミスマッチだろうが不釣り合いだろうが僕にとってそんなことは些細なこと。さらにその人が何かをつぶやいているが今の僕には全く気にならない。

「……ぶつ……ぶつ」

……色んな意味で怖かった。
森の中で不似合いなおかしな格好、でもそれは別にいいと思う。どんな格好で山に登ろうがその人の勝手だからね。モデルのような体型も恐怖とは程遠いもの。
なら僕はいったい何に恐怖しているのかと言うと。
主にその人の頭部。それとその人がとっている行動。
その人は顔に白馬のお面をつけた状態で、青いおもちゃのプラス

チックのバットを握り全力で素振りをしていた。
空を切る軽い音。振っては構え、振っては構える。
野球のことはよく知らないけれど、とても綺麗なフォームだと思った。
バットを振る度にスカートがギリギリまでめくれていて、大変目のやり場に困ってしまう。
馬のお面で視界が狭くなっているせいか、様子を見ている僕の姿に全く気付いていない。さっきから草むらを踏みしめる音を鳴らしているのだけれど、それにも気づいていない。お面の中で自分のつぶやきが反響して周りの音が聞こえづらくなっているのだろうか。被ったことがないのでよく分からない。
女の人はひたすらプラスチックのバットを振っていた。終いには素振りをやめて地面にバットを叩きつけ体全体で怒りを表現するようになっていた。
地面をぼこぼこにする姿はスタイルの良さも帳消しになる位みっともなかった。
モデルさん並みなのに……何か残念だ。いやぁ、変な人だなぁ。
地面を殴ったり地団太を踏んだり傍にある木を思いっきり叩いて手を痛がったり。
しばらくぶつぶつ言いながらバットを振り回し続ける女の人。不安定な山の地面の上でミュールなんかを履いてあれだけ暴れまわれるなんて運動神経がいいんだなぁなどとどうでもいいことを考えてみる。
そんなことを考えながら僕がその光景に目を奪われていると、突然その人の動きが止まった。
そして、ゆっくりとこちらを振り向き――
「う、うぁあああああああああああ！」
僕は白馬と目が合う前にその場から全力で逃げ出した。本当に怖

かったんだもん。
全力、必死に、何度も転びそうになりながら秘密基地まで止まることなく振り返ることなく逃げてきた。
深呼吸をして息を整える。僕はあまり運動が得意ではないからすぐに息が切れてしまう。膝に手をついて走ってきた草むらを振り返る。

「うわっ！　追ってきてるーーーーーーーー！」

白馬がバットを振りながら猛スピードでこちらに迫ってきていた。

「おわわわわわわ」

まだ息が上がっている、走れない！
逃げることができない僕は地面にへたり込むことしかできなかった。
白馬が迫ってくる。ミュールなのに物凄く軽快なステップ。やっぱり僕と違って運動ができるみたい。
ってそんなことよりも……。
僕はどうなってしまうのだろう。あのプラスチックのバットで殴られるのだろうか。痛いのかな？　痛いよね……。
無駄なことだとは分かっていても、僕は後ずさりをして少しでも白馬から距離をとろうと試みた。
当然、無意味。
僕と二足歩行の馬との距離はあと五メートルも無い。ああ、おしまいだ。痛い目にあっちゃう。
諦めた僕。
でも神様は僕を見捨てていなかったようだ。

「！！！」

馬のお面が枝に引っかかり頭からそれが取れた。
女の人の頭が大きく後ろにのけぞり、すぐに前のめりになる。お面の下に隠れていていて見えなかった長く黒い髪が頭を越え顔の方に流れた。艶やかな黒髪一本一本が意志を持っているかのように木漏れ日の光を反射していた。
それに目を奪われていたが、すぐに女の人は恥ずかしそうに顔を隠し逃げるように森の奥へと走り去った。
「な、何だったんだろう……」

ユウ：ってことがあったんだ
まりも：にわかには信じられない話だね
ユウ：でも本当なんだ！　本当に変な人がいたんだよ！？
まりも：もちろん信じているさ。その馬の後を追ったのかい？
ユウ：まさか！　追うわけないよ！　殴られたら痛いでしょ！
まりも：それはそうだけど、気にならないのかい？　そんな変質者滅多にお目にかかれないよ。私なら後を追って正体を突き止めるね
ユウ：でも、怖いし……

まりも：まあそうだろうね。でも今度会ったら是非その姿を激写してほしいね

ユウ：もう会わないよ！

まりも：まあ会わないならそれがいいだろうけどねw　それじゃあ、私はもう寝るよ

ユウ：うん

まりも：お疲れ様

僕はスカイペからログアウトしてパソコンを切った。

僕が唯一自信を持って友達だと呼べる人は、ディスプレイの向こうの顔も知らない女の人。女の人かどうかも分からないけれど、自分でそう言っていたので僕は信じている。

その人と毎晩のようにスカイペで話をして、一日を終える。相手の声を聞いたことは無いけれど、きっと優しくって柔らかい人なのだと思う。

実際に会って話してみたいけれど、今の関係で充分満足しているのも確か。

僕は踏み出せずに今日もスカイペでその日遭った事の話をするだけにとどまっているのだった。

僕の学校生活

馬と出会った日曜日から四日が経ち今日は木曜日。僕の馬に対する恐怖心とは裏腹に平和な日々が流れていた。

馬が通学路で待ち伏せしているとか、人込みで知らない人に話しかけられるとかそういった妄想に囚われていたけれど、日常を逸脱するようなものは片鱗すら覗かせることは無かった。

このまま何事もなく馬のことを記憶から追いやることができるのかなと思い始めていた今日この頃。朝学校に来た僕は、人の少ない教室に入り真っ直ぐに教室の一番隅、最後方の自分の席へ向かった。座ってすぐに本を引っ張り出し文字の世界に没頭する。

本は良いよね。文字を読むだけで誰にも迷惑かからないから。

僕の好きなライトノベル。ライトだもんね。ファンタジーや学園モノをよく読んでいる。憧れちゃうよね、こういう世界。

僕の名前は佐藤優大（さとうゆうた）。普通の高校一年生。友達のいない僕を普通と称していいものかどうか悩むところだけれども、普通だと自覚しているので普通って言う。身長も低いし勉強もできない。顔もかっこよくないし性格だってよくない。特殊な能力がないどころか普通の能力すらも無い僕は漫画や小説の主人公にはなれない。

よし、自己紹介の練習もばっちりだ。これでいつ小説の世界に飛ばされても自己紹介に困らないね。……自分で主人公にはなれないって言ってるのにそれを知りながら主人公になることを望んでいる僕ってなんなんだろう……。

でも万が一に備えるのはいいことだよね。うん。

誰とも朝の挨拶を交わすことなく本を読み続ける。寂しい朝だけど、もう慣れた。別にいじめられているわけじゃないよ？　挨拶を交わすほど仲のいい人がいないだけ。

どんどんクラスメイトが登校してきて、教室に人が増えてくる。

本に目を落とし騒がしい教室から視線をそらす、ふりをする。

実は僕の趣味は人間観察だったりする。
誰も僕のことを気にしていないけれど、僕はみんなのことを気にしている。
高校一年生の六月下旬。友達はいないけれど日頃の人間観察のおかげで、大体の性格と人間関係が分かった。
このクラスは、大きく分けて三つの派閥に分かれているらしい。
一つ目はかっこよくて運動神経抜群な沼田君が率いる男子連盟（連盟名は適当）。沼田君は本当にかっこいいしユーモアのセンスもあるしクラスの男子の中で一番信頼されている人。僕も沼田君みたいになれたらなぁっていつも思っている。
二つ目の派閥は女子の中心人物、有野さんが中心となっているチーム有野（やっぱりチーム名は適当）。有野さんははきはきとした物言いで、好き嫌いをはっきりと言うタイプの人。このクラスの女子どころか一年生女子のリーダー格みたいだ。
そして、三つ目――
僕はその三つ目の中心人物に目をやった。
黒くて長い髪。雪のようにふわふわした白い肌。すらりと伸びる細くて長い脚と母性を感じさせる大きな胸。
このクラスの委員長、楠若菜さん。
驚くほど整った顔立ちをしている楠さん。一番美人だと思う人を一人思い浮かべろと言われたら、多分この学校にいる人はアイドルより誰より先に楠さんを思い浮かべると思う。きっと、これからの人生で楠さん以上の美少女には出会えないだろう。
運動神経がよくって、当然のように勉強もできる。
美少女で、勉強ができて、運動神経ができて、おまけに性格までいいと来てる。僕が読んでいるライトノベルの主人公みたいでかっこいい。
三つ目の派閥はその楠さんを慕って集まる楠ファンクラブ（ファンクラブ名はもちろん適当だ。ファンクラブなんて存在しない、仮のものだよ）。クラスの半分の女子を有田さんと取り合っている状

態（楠さんにはそんな気ないみたいだけど）。多分、僕の勘だけど近い将来楠さんが女子の中心になると思う。楠さんはとっても親切で、欠点が見つからない。それに比べて有野さんは少し我が強く、魅かれる人も多いけど敵も多いみたい。僕は惹かれる人間もいないし敵もいないけど……。

沼田君と、有野さんと、楠さんの三人がこのクラスの中心人物。

楠ファンクラブとチーム有野は覇権を争って対立しているけれど、楠ファンクラブと男子連盟は男女連合を作るほどとても良好な関係を築けている。男女連合の総長は、当然楠さん。

つまり、実質的にこのクラスのトップは楠若菜さんなのだ。委員長だし、当然と言えば当然かも。

トップの人間が素晴らしい人物なので対立していようがクラスの雰囲気は穏やかだ。楠さんは凄いと思う。

……でも最近、その平穏が脅かされて、不穏な空気が流れだしている……。

有野さんは楠さんがトップなことが本当に面白くないみたいでよく楠さんに突っかかっている。楠さんはと言えば全く気にしていない様子で、相手にしない分不穏な空気は広がらない。でも最近は別の要因も発生してそのせいでクラスの空気が不穏になってきているんだ。

別の要因が発生したのは楠さんが委員長なことが関係している。

委員長は二か月前に決めたのだけれども、副委員長は必要ないということで長らく空席だった。しかし夏休み明けにある文化祭に向けてやっぱり副委員長を決めようという男子の総意でこのたびその一つの席を巡って男子たちが争い始めたのだ。

当然、楠さんと一緒に仕事がしたいっていう下心全開な考えだ。男子たちは選ばれしものだけが就けるその役職を目指して日々楠さんにアピールしまくっているのだ。さすがに有野さん以外の女子もそれは面白くないみたいで、楠さん……と言うより男子たちに冷たい目線を送っているのだった。

当然、僕は蚊帳の外。
いじめられているわけじゃないよ？
ただ僕なんかがそれに混ざったらもっと不穏な空気になっちゃうからね。僕は見ているだけでいいんだ。
そう、見ているだけで。
そう言うわけで僕はその様子、主に楠さんを眺めていたのだけれども、あ、しまった。
楠さんと視線が合ってしまった。
怒られる。じろじろ見ていたことを咎められちゃう。
うわあああああ。楠さんがにっこり笑って近づいてきた！
慌てて本に目を落とす僕に、楠さんが黒くて長い髪を掻き上げながら話しかけてきた。

「佐藤君」

名前を呼ばれた。でも緊張して顔が上げられない。
寂しい朝に慣れてしまったせいか、誰かに話しかけられる朝が来ると焦ってしまう。

「おーい。佐藤優大君」

反応したいけれどちらりと視線を送ることしかできない。なんて言えばいいんだろう……。
困っていると、楠さんが質問してくれた。

「何読んでいるの？」

質問なら、答えを返せる。

「あ、えっと、これは、ライトノベル……」

「ライトノベル？」

上目遣いで楠さんを見てみると、とても素敵な笑顔で首をかしげ僕の目を見ていた。

「ライトノベルって何？」

「……えっと……、ライトな、小説……」

なんと説明していいものか分からなかったので曖昧な説明になった。

「へぇ！　そうなんだ！」

僕の適当な説明にも明るい笑顔を返してくれる楠さん。みんな副委員長の座を狙うのもよく分かる。

「おもしろい？」

「う、うん」

でも、何故だろう。今までほとんど話したことが無かったのに、一昨日あたりから妙に話しかけてこられる。にこにこ眩しい笑顔を見せてくれるけど、それと同時にクラスの男子全員から熱い怒りの視線も受けることになるので少し居心地が悪い。僕悪くないのに……。

「どうしたの？」

僕の晴れない顔を見て、楠さんが心配そうに聞いてくれた。
「悩み事があるなら私に言ってね？」
「あ、うん。ありがとう。でも何もないから大丈夫だよ」
「本当？　ならいいんだけど」
「うん、大丈夫」
最後まで優しい空気を作りながら、楠さんが女子たちの輪に戻って行った。
あー、緊張した。何と言ってもこのクラスのトップだからね。緊張しちゃうよ。
……。楠さんが離れて行ったのに男子たちの目は依然鋭い。僕悪くないのに……。
僕は逃げるように本の世界に飛び込んだ。

今日も一日何事もなく終わった。
残すはホームルームだけ。
変わらない日常。これがいいことかどうかは僕にはわからないけれど、僕は満足している。日常が変化してどうなるのか分からないのなら、平和な今が続けばいいと思う。
だから早く帰ってお姉ちゃんと弟のご飯作ろう。
机の上で教科書をトントンしてカバンの中にしまう。あとは席について先生を待つだけだ。

先生はすぐに来た。そういえば小学校時代に「先生が来た！」って言ったら「いらっしゃったでしょう！」って本気で怒られたっけ。そこまで怒ることないのにって思ったけどあのころから言葉づかいを教えておけば将来困らないもんね。さすがは先生。
そういうわけで先生はすぐにいらっしゃった。

「席に着けー」

先生の声にみんなが従い席に座る。静かになった教室を見渡しホームルームを始める。

「特に連絡事項はないからさっさと終わろうか」

面倒くさい話をしない先生だからいいね。

「あーそうだ」

あれ？　珍しく話があるのかな？

「えーっと……」

誰かを探すように教室を見渡す先生。僕じゃないよね。僕に用事なんかあるわけないもん。しかし先生僕を見て、

「佐藤、放課後暇か？」

ぼぼぼ僕ですか？！

「えっと、その、……一体なんでしょうか」

「ああ、ちょっとこの後資料の整理があってな。男手が必要なんだが、このクラスで部活をしていないのは佐藤だけだからな」

なるほど……。何もできないからこその僕なんだ。

「あ、あの、でもっ」

「え？　暇じゃないのか？」

「……いえ、暇です……」

「そうか。じゃあよろしく頼む」

……今日の晩御飯は送れそうです、お姉ちゃん。

先生の言いつけどおり放課後残る。

「じゃあ佐藤、ちょっと来てくれるか？」

「あ、はい」

先生に連れてこられたのは三階にある資料室と言う名前のよく分からない教室。本棚の中には沢山の資料が詰め込まれている。これを整理するのかな？

「とりあえずこの本棚を空にしてくれ」

「はい。……はい？」

この本棚っていうと、目の前にある本棚だよね？　幅三メートル高さ二メートル。約。そこにぎっしりと詰まった謎の資料。これを空にするのかな？　本棚から出すだけでいいのかな。

「これを焼却炉に持って行ってくれ」

「え、ええ……」

さっきも言ったけどここは三階。そして本棚はぎっしり。これじゃあいつ帰れるのか分からないよ。

「じゃあ、後は頼んだ」

「え？！　先生は……？」

「俺は仕事があるからな。良いだろう佐藤。どうせお前暇だろう」

「い、いえ、そんなに言うほどは暇じゃないです……」

「なんだ。用事があるのか？」

「は、はい。早く帰らないとお兄ちゃんご飯って言って泣かれるんです」

「あれ？　お前の弟はそんなに幼かったか？」

「あ、いえ、姉です」

「……じゃあ佐藤頼んだぞ」

「え、いや、本当の話で――」

先生は僕の話を最後まで聞かずに資料室を出て行った。

こ、困ったなぁ。本当にお姉ちゃんに怒られてしまう……。

ううん。悩んでいても仕方がない。早く終わらせる以外に帰れる方法がないんだから余計なことを考えずに資料を持って行こう。

僕は本棚の上の方から資料を取り出した。……重い。とりあえず持って行こう。

そして僕は二度の階段の上り下りで腕の筋力が無くなってしまった。本って重たい。どうしよう、これ時間がかかるよ……。

困ったなぁ、どうしよう……。

ああ、いや、そんなことやりながら考えればいいんだ。

僕は本を持った。

ひぃひぃ言いながら階段を下りる。重たいよ。しかもいい方法が思いつかない。

「早く帰らなきゃいけないのに……。遅くなっちゃうよ」

つぶやいてみても何も解決しない。足を動かさなきゃ。

愚痴りながら一階へ続く階段を下りた先に。

「佐藤君？」

まさかの楠さんがいた。

「楠さん。さようなら」

忙しいしどうせまともに話せないから僕は軽く頭を下げて先へ進

んだ。けど、引き止められてしまった。

「ちょっと待って、佐藤君。それもしかして先生に頼まれた仕事？」

「あ、うん。そう」

「大変そうだね。時間かかりそうなの？」

「ううん。そんなことも無いよ」

「でも今遅くなっちゃうって言ってたよね？」

「え、聞いてたの？」

「あ、うん。たまたま、たまたまね？　偶然耳にね？」

なんだろう？　三日前から楠さんに僕のつぶやきをよく聞かれてしまう。僕の声が大きいのかな？

「私も手伝うよ」

「え」

手伝ってくれるって！　さすがだなぁ！

「一人でできるからいいよ？」

でも僕はありがたい申し出を僕は断っていた。だって人に迷惑かけちゃいけないからね。

「でも早く帰りたいんでしょ？　手伝うよっ」

作り物のような完璧な笑顔。みんなこの笑顔に癒されているのだろう。でも僕は困る。直視できないしなんて言えばいいか分からないから。褒めることもできないよ。恥ずかしいもん。

「で、でも……重いから……大丈夫だよ」

「重いからこそ手伝うんでしょ」

「でも、先生だってわざわざ男の僕に言ってきたし、その、楠さんに手伝わせるのは、あの」

「……え」

長いまつげをぱちぱちと動かしとても驚いていた。なんでだろう。まるで断られることが予想外だとでも言うような顔だ。

「……そんなに大変じゃないとか？」

「あ、うん。そう。そう」

「……へぇ、そうなんだ。なら、他に手伝うことないかなっ！」

う、眩しすぎる笑顔だ。目がくらんじゃうよ。

「だ、大丈夫だよ。もうこれで終わりだし？」

全然終わりそうにもないけれど疑問形にしたから嘘にはならないよね。……ならないのかな？

僕の言葉を聞き楠さんがしばらく考え、

「……なら、頑張ってね」

何故だか不満そうに帰って行った。

ずっと資料を持ちっぱなしだったから腕が痛いよ。とにかく早く終わらせよう。

七時。結局三時間かけてやっと終わった。まさかこんなにかかるとは思わなかった。腕はもう使い物にならないね。

全部運び終わったころ、先生が様子を見に来た。

「ありがとう佐藤。もう帰っていいぞ」

うううう……淡白だなぁ。でもいいや。

やっと帰れる……。お姉ちゃんに怒られるよ。

夕日の沈む直前の空。赤い街の中疲れ切った腕を揉みほぐしながら帰路につく僕。途中で、あの馬に会った山へ続く道を通りがかったので少しを眺めてみる。あの馬が待ち伏せしているのではないかとドキドキしながら見ていたら、山の方から人が降りてくるのが見えた。あの時の馬だ！　と慌てて電信柱の陰に隠れた。

緊張する。

また襲われたらどうしよう。プラスチックのバットで殴られてしまう！

そう考えたら怖くていつの間にか向かってくる人に背を向けていた。恐怖で見ることができなかった。

足音が近づいてくる。このまま気づかずにどこかへ行ってくださ

い！
どきどきどきどき。
願い虚しく足音は僕のすぐ後ろで止まった。
「佐藤君？」
その人はとても優しい声で僕の名前を呼んだ。
「え？」
名前を知っているということは僕の知り合いと言うことだ。安心して声の主を確認してみた。
違う意味でピンチだった。
「く、楠さん……」
ああ、今日はよくこの人の顔を見るなぁ。
緊張してなにを話せばいいのか分からないよ。
「佐藤君、もしかして今帰り？」
「あ、うん。そう」
「こんなに時間かかったの？　仕事大変だったんじゃない！」
可愛い声と顔で怒られた。
「え、ま、まぁ……」
「手伝ってあげるって言ったのにっ」

頬を膨らませ可愛く怒る。

「でも、終わったからいいよね」

「……まあ、いいけど。でもなんで助けを求めなかったの？」

「え？　申し訳ないから……」

一瞬とても楠さんに似合わない顔が見えたけどすぐにいつもの穏やかで明るくって親しみやすくって素敵でふわふわでとにかく地上の物とは思えない笑顔を作ってくれた。あれ？　僕ヘンタイかな……。

「今度は私も手伝うからね」

「あ、うん。ありがとう」

やっぱりいい人だなぁ。夕日が山に隠れ始め、赤から黒に変わり始めた街の中、楠さんが笑顔で立っている。僕なんかが正面に立つことは許されることではないのに、ましてや言葉を交わすなんてみんなに申し訳ない。って、あれ？

「あの」

「なにかな？」

首をかしげ、長く夜のように深い色の髪の毛を鳴らす。

「何か聞きたいことでもあるの？」

美人過ぎて自分の存在が情けなくなる。生きているのが申し訳ないよ。僕なんかが一緒の空気を吸ってもいいのかな。

「どうしたの？」

しまった。ついつい自己嫌悪に陥ってしまい楠さんに話しかけたことを忘れていた。話しかけておいて無視するとか失礼にもほどがある。僕は慌てて気になることを聞いてみた。

「こんな時間に山に何の用事かなって思って……。もう暗くなるし、危ないんじゃないかなーって」

あれ？　こんなプライベートなこと聞いてもよかったのかな！
もしかしたら僕はものすごく失礼なことをしているのではないでしょうか！

「ええ、まあ、色々と」

やはりプライベートなことだった。聞いちゃいけないいみたいだ。

「でもこの辺りは変な人が出るみたいだから……。気を付けた方がいいよ？」

僕の言葉を聞いて笑顔が冷たくなる。

「変な人と言うと、たとえばどんな人？」

「え、変って……変な人だけど……」

「だから、どんな人かって聞いてんの」

う、怖い。

「あ、ごめんね」

すぐに暖かい笑みに作り直す。あーびっくりした。怒られるのかと思った。

「それで、変な人ってどんな人？」

何故だか妙に変な人にこだわる楠さん。なんでだか僕には全く分からないや。

「変な人は変な人だよ」

変な人だもんね。

「ヘェソウナンダ」

最終的に妙にぎこちない笑みを作って山の方へ向かっていった。

「く、楠さん？　もう暗くなるよ？」

「ハハハハハ」

笑いながら手を振って木々の中に消えて行った。

危なくないかなぁ……。追った方がいいのかなぁ……。でも怖いし……。……ぷ、プライベートなことだし、追わない方がいいよね。うん。なんで山に行くのか分からないし。

僕は後ろ髪を引かれる思いをしながら家路を急いだ。
家についた僕。
お姉ちゃんに泣かれたり弟にフォローしてもらったり色々あったけど無事に自室のパソコンをつけられた。これが毎日のお楽しみ。僕はすぐにスカイペにログインし、顔も知らない友人を待つ。しかしいくら待っても友人・まりもさんはログインすることは無かった。仕方がないので一人ニヤニヤ動画を見てにこにこしておこう。
ニヤニヤ動画かぁ。僕も何か投稿してみたいなぁ。でも僕面白くないしなぁ。何か面白い動画撮れないかなぁ。
……。
あ、そうだ。そう言えば昨日まりもさん（スカイペの相手）に変質者がいた証拠を撮ってきてくれって言われてたっけ。どうせなら動画を撮ろう。あ、別に投稿しようっていうわけじゃないよ？　あの変な人は写真なんかよりも動画の方がその凄さが伝わると思ったから動画を撮ろうって思っただけだよ。

馬の中の人

いよいよ放課後。僕はあの日であった馬の動画を撮りたいがために、先生に捕まらないうちに早めに教室を出で真っ直ぐに秘密基地へ向かった。

やっぱり秘密基地はいつも通りの顔で僕を迎えてくれる。一応念のために、何の念のためにかは自分でも分からないけれど、一応念のために秘密基地もとい秘密テントに首を突っ込んで中を確認してみた。

異常なし。

秘密テントから顔を引き抜き僕は森の奥に視線を向けた。

……。

ここまで来て少し怖くなってきた。やっぱりやめようかな……。

……。

……うん。そうだよね。盗撮になるし、いけないことだよね。やめよう。

と、引き返そうとしたとき。

「！」

僕が登ってきた道から誰かが登ってきた！

逃げる必要はないのかもしれないけれど、馬に対する恐怖がすべての物に作用し僕は思わず森の奥へと逃げてしまった。

逃げて逃げて何故かあの馬が暴れていたところまでやってきてしまった。辺りを見渡してもあの馬はいない。でも後ろを振り返ってみると登ってきた人がこっちにやってきている。も、もしかしたら、あの時の馬本人なのかもしれない……。

恐ろしいので僕は少し戻って木の陰に隠れてやり過ごすことにした。

……怖い。また馬を被っているのかな……。
その人をやり過ごし、その後ろ姿を覗き見る。
背の高い後姿。後頭部から垂れる黒く長い髪が規則正しく揺れていた。しかもその人は僕と同じ高校の制服を着ている。だ、誰なんだ！　顔を見なければ全然わからないよ！
何かを探すようにきょろきょろと視線を動かしている。もしかして僕の存在が見つかったのかもしれない。ど、どうしよう……。やっぱりあの青いバットで殴られるのかな……。で、でも今は何も持ってないし、そもそも馬の人かどうかも分からないし……。
僕が恐怖に支配された精神でがくがくとその人の観察を続けていると、とうとうその人の顔を拝むチャンスがやってきた。
ゆっくりと、その人が振り向く。い、一体……誰なんだ……！
全然想像もつかないよ！

「あれ？」

そこにいたのは馬であるはずのない人だった。

「く、楠さん……？」

完璧少女の楠さん。まさかこんな娘を疑ってしまうなんて。僕はダメだなぁ。
僕は安心して木の影から出た。

「……そこに隠れてたんだ」

ふらりと僕を見る。

「え、う、うん。僕がこの山にいるって知ってたの？」

「当たり前でしょう。追ってきたんだから」

え、誰？　本当に楠さん？　その前に、追ってきたってなんで？

「どうしてここにいるの？」

と楠さん。

「あ、この前ここで変な人に会ったから写真でも撮ろうかなって思って……」

「ふーん。いい趣味してるね」

これは褒められていないと僕でも分かる。

「で、写真はもう撮ったの？」

「え、いや、変な人いないみたいだから……まだ撮ってない……」

「へぇ～……」

楠さんとは思えない顔ですね。

「え、え、え？　も、もしかして僕悪い事した？」

「……分かってるんでしょう？」

いつものような暖かい笑顔じゃない。っていうか、笑顔がないね。ものすごーく怖い無表情。とりあえず怒っているみたいだから謝ろう。僕が悪いんだから。

「ごめんなさい」

頭を下げた。

「やっぱり分かってたんだ」

ゴミでも見るかのような目。怖い。分かってたって、いったい何のことだろう……。でも怖いから聞けない。

「それで、気になることは無い？」

「え、えっと……」

しいて言うならばなんで怒っているのかを聞いてみたい。けど怖いから聞けない。

「聞く必要がないって？　へぇ、それはそれは」

何も言ってないけど。

あの優しい楠さんがここまで怒るなんて……。僕はそれだけのことをしたんだ……。ああ、償いたい。でも罪を自覚していないのでどう償えばいいのか分からない。聞けばいいのだろうけれど、怖いから聞けない。

「ご、ごめんなさい……」

謝ることしかできない僕を誰が責められようか。

「見ちゃってごめんなさい？　ムカつくね」

む、むかつく?！　あの楠さんが今ムカつくって言った?！　やっぱり偽物?！　怖いから怒っている理由聞けないと思ったけど、聞かないで怒られている方が怖いことに今気づいたよ！

「あの、その、な、なんで怒っているのかわかりません！」

思わず敬語になるほどに怖い！

「いい加減分からないフリやめてよ。私だってもう隠さないで本音で話してるんだからさ、君も本音で話そうよ」

「ほ、本音です……。本当に分からないよ……」

「嘘ばっかり。ずっと私の事監視してたじゃん。あの時顔見たんでしょ」

あ、なるほど。ここ最近目が合う機会が多かったから監視されてると思われちゃったんだ！　でもあのときっていつのこと?！

「ごめんなさい！　その、あの、えっと」

言い訳のしようがないよ！

「ごめんなさい……」

学校生活を諦めよう……。楠さんに嫌われるのは一年生全員に嫌われるのと同義だから。

「謝らなくていいから。とりあえずあの時落とした私のお面返して

よ」

怒った顔で手を差し出してきた。

「お面……？　って、何？」

はぁあああああと大きくため息をつく楠さん。

「い　い　か　げ　ん　に　し　て　く　れ　な　い　か　な」

一文字一文字間にスペースが入るほどにキレていらっしゃる！

「あの時の馬のことに決まってんでしょ。持って帰ったの？　捨てたの？」

……。

「え、なんで馬のこと知ってるの？　あれ？　楠さんも見てたの？」

どこにいたんだろう。木の陰に隠れてたのかな？

「見てたって……そんなの知ってて当たり前じゃん」

眉根を寄せて怒っていることを教えてくれる。

「ど、どうして？」

僕は首をかしげて聞いてみる。

「ああ、なるほどね。私の口から言わせたいわけ」

な、何のことだろう。
何かに納得したように頷いて楠さんが言った。
「あの時の馬は私です。これで満足ですか？」
……。
……。
……。
……ええええええええ？！
それ初耳なんですけども！　全然わからなかったよ！　うん！
「それで」
楠さんがこっちに近づいてきた。
「そ、それで……？」
僕の目の前で止まる。
「この事実を知った君はどうするつもり？」
「ど、どうするもこうするも……」
今初めて聞いたし、まだ何も考えられない……。
「まあ、どうせ君も他の男みたいに私をいやらしい目で見てるんでしょ。私は可愛いからね」
うん。自分で言っても許される可愛さだと思うよ。

「そういう人間が何をするのかは大体想像がつくよ」

何をするって……、黙ってるつもりだけど……。言いふらしたりしないよ？

「どうせ君はこのネタを使って脅すつもりなんでしょ」

「えええええ？！」

そんなことしないよ！　って言いたいけど楠さんの顔が近すぎで緊張して言葉が出ない。

「あーいやらしいいやらしい。人間なんてみんなそう。特に男はクズばかり。女みたいな顔してる君だって例には漏れないでしょう」

と言って顔をぐいっと近づけてきた。

うわー！　近い！　綺麗な顔が近いよ！　思わず目をそらしちゃうよ！

「でも私はそんなことさせないよ」

楠さんが片手で僕の頬を挟み込み、無理やり自分と向かい合わせる。僕の方が背が低いから少し見上げる形になってしまう。僕は直視することができずに固く目を瞑った。

「君は私を脅せない」

「う、うううう」

い、痛いです。痛いです楠さん。

「だって、脅すのは私の方だから」

「え？」

どういう意味か分からず目を開ける僕。いや、もう開けない方がよかったとすぐに後悔したよ……。
目の前に広がる楠さんの綺麗な顔。眩しいよ。
いや、そんなことよりも。
僕は、
何故だか分からないけれど、
楠さんに、
キスをされていた。

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

…………………。
ぎゃあああああああああああああああ！　意味が分かりませんんんんん！
僕は完全に思考が停止してしまい指先一つ動かすことができなくなっていた！
直立不動の僕の横で、携帯のシャッターの音が鳴った。それと同時に楠さんが離れる。

「な、なななななにを？　なななんで？！」

ぼ、僕の純潔が！　何が起きているのでしょうか！　これ地球終るんじゃないの？！　ぼ、僕のような下賤な人間が楠さんとせせせ接吻を交わすなどと世間様にもももも申し訳が立ちません！

「……」

楠さんは慌てる僕を無視して、満足そうな表情で携帯を眺めていた。

「くくくくく楠さん？！　せせ説明をお願いしてもいいですか？！」

とりあえず僕は無視される。

「ああ、なんて哀れな私……」

よよよと泣きまねを見せる楠さん。な、何が起きているのかさっぱり分かりません！

「い、いったい、どういうことでしょうか……」

少し落ち着いてきた。でもドキドキは一向に収まる気配を見せてくれません……。多分今日はもう無理です……。

「君は今私に無理やりキスをしたの。そう言うこと」

無理やりって何？！　意味が分かりません！

「あ、あの、詳しい話を教えてほしいんだけど……」

「そんなことよりさっさと携帯出してって言ってるの。赤外線送信」

「え、あ、はい」

同じこと言わせないでみたいなことを言われたけれど初めて聞いたよ。でも僕は言うとおりに携帯をだし、楠さんの携帯と向かい合わせる。そして言われるがままにプロフィールを送信した。
楠さんが送られてきた僕のアドレスにメールを送ってきた。僕はそれを開封。何やら添付されている。開いてみた。

「うぎゃあああああああああああああああああああああああああ！」

楠さんと僕のキスシーンだった！　なんの羞恥拷問ですか！

「ななななんですかこれは！」

「そんなの決まっているでしょう。私が、君に、無理やり、キスを、されているシーン」

「そんなに単語分けしなくても分かります！」

でも結局なにを言っているのか分からないので慌てて写真を見てみる。恥ずかしい！　恥ずかしすぎるよ！　けど我慢してよく見てみる……。
自分のファーストキスを客観的に見てみる。異次元の美貌を持つクラスメイトと唇を合わせている僕。……。うばばばばばばば。……いや、もう現実に起こったことを認めて前へ進もう。僕は取り返しのつかないことをしてしまったんだ。罪を背おって生きなければ。
とにかく今は楠さんの言葉の意味を知ろう。
何となく薄目でディスプレイを見る。
楠さんはなんて言ったっけ。
無理やり、僕が、ききき、キスを、しているシーンって、言ってたっけ。

ディスプレイに映し出されていた楠さんの表情は苦しみに満ちたもので、確かに、どう見ても、僕が無理やりしているようにしか見えなかった。

「あーあ。私のファーストキスが君みたいなもやし野郎に奪われちゃったのか。人生何が起きるか分からないね」

「……も、もやし……」

口が悪い……。楠さんだとは思えない……。
って、ファーストキスだったんだ……。……。……。……。
それってこんなところで散らしていいものなのですか？！

「とりあえず、君は無理やり私にキスをした。その事実はオッケー？」

「……。……いやいやいやいいやいやいやいや！　おっけーじゃないよ！　ちょっとぼーっとしてたけどオッケーじゃないよ！　アウトです！」

「うるさいね。君は今私に口答えできる立場じゃないの」

そう言って携帯を開いて僕に写真を見せてきた。
さっと視線を外す。自分で見るのより楠さん本人に見せつけられたほうがなんだか恥ずかしい。

「そ、そんな。く、楠さんが……じぶんで……」

「あーはいはいはい。別に君がどう思っててもいいよ。こっちには証拠があるんだから」

「証拠って……。それは楠さんが僕に無理やりキ、キスした証拠じゃあ……」

「何言ってるの？　この写真が全てを物語っているじゃない」

「確かに、この写真だけ見たら僕がその、無理やりしているように見えるかもしれないけど……ちゃんとみんなに説明すれば……」

「私と君の言葉、みんなはどっちを信じるかな」

う。当然楠さんの言葉を信じるね……。僕だってそうだもん。僕みたいな芋虫なんかより楠さんのような蝶の話を信じちゃうよ。

「ご理解いただけましたかね。君のこれからは私が握っているの。脅す立場から脅される立場になっちゃったの。オッケー？」

おっけーと言わざるを得ないよ……。

「うううう……僕脅すとか考えたことなかったのに……」

そもそも知らなかったんだから。

「嘘ばっかり。人間はみんなクズ。どうやって上に立つ人間を蹴落とすかしか考えてないんだから。完璧美少女である私の欠点を見つけた君はそれをネタに私を脅してエッチな命令を下してそれを眺めながら下卑た笑みを浮かべるつもりだったんでしょう気持ち悪い」

酷い妄想だよ本当に。

「でも残念。君はこれから私の言うことを聞かねばならない立場になりました。とりあえず手始めに馬返して」

ずいと手を差し出してくるけど僕は何も渡せない。

「ほ、本当に知らないよ……」

あの後すぐ帰ったもん。

楠さんがゴミを見る目で僕を見た後、ため息をつき言った。

「……まあいいや。じゃあひとまず今日は解散。明日君の家に行くからそのつもりで」

え、僕の家に来るの？　あの超絶美少女が？　すごいことだよこれは。でも全然嬉しくないや！　不思議だね！

「今は混乱しているだろうから、一晩よく考えていいよ。でも一晩だけしか時間あげないから」

そう言いながら僕とすれ違いこの場を去る楠さん。

僕はがっくりとうなだれた。何が何だか分からない……。

「佐藤君」

後ろから聞こえてくる声が僕の耳をくすぐる。先ほどまでの声じゃない。僕は思わず振り返っていた。

そこにいたのは、いつもの、僕が知っていた、誰もが憧れる優しい楠さんだった。

「ばいばい佐藤君。これから、仲良くしようねっ」

その表情を見て、不覚にも僕はドキドキしてしまった。

可愛い同級生が起こしてくれる朝って夢だよね。でもそれって都市伝説でしょ？

楠さんとキ、キスをした次の日。
土曜日だよ。
ドキドキを収めてやっとのことで眠りについた金曜日。眠るのが遅かったから、いつもより深い眠りについていたらしい。
起きた時にはいつも起きている時間、朝八時を一時間も過ぎていた。
つまり今は九時。
寝坊したこともそれなりに驚いたのだけれども、今はそんなことはどうでもいいと思える状況だった。

「あわわわわ」

どんどんと。
僕の部屋の窓が叩かれていた。
物凄く怒った顔をした美少女に。

「な、何してるの楠さん！」

僕の部屋は二階。楠さんが立っているのは屋根。もちろん斜めの屋根。
僕は慌ててカギを開け屋根の上にいた楠さんを部屋に迎え入れた。
ベッドに降り立ち僕を睨み付ける楠さん。ジーンズにTシャツ。動きやすい格好だ。初めから屋根の上に登るつもりできたのだろうか。

「起きるのが遅いよ。私がどれだけ待ったと思ってるの」

そう言って肩にかけていたカバンを僕に投げつけてきた。
どれだけ待っていたかは、楠さんの髪がぼさぼさだから長時間風にさらされていたのだろうと想像できる。
僕はカバンを地面に置き聞いてみた。

「な、な、なんで屋根から?!　危ないよ!」

ぼさぼさの髪の毛を撫でつけながら楠さんが言う。

「何言ってるの。昨日君が無理やり部屋に連れ込んだんでしょう。だから君の家族は私がここにいることを知らない。私がここで助けてと叫んだら君は自宅でさえ居場所がなくなってしまう。叫んでいい?」

「そ、そんな理不尽な……。僕は何もしてないのに……」

「寝ぼけてるの?　佐藤君、君は昨日私に無理やりキスをして無理やり部屋に連れ込んでいやらしいことをしたでしょう。覚えてないの?」

「そんなことしてないよ!　特に後半身に覚えがないどころの騒ぎじゃないよ!」

「なに?　口答えするの?」

ジト目で僕を見下ろす。でも感情はこもっていない。

「ここで叫んでもいいの?」

「よ、よくないです……」

「なら認めて。君は、私を、無理やりここに連れ込んだ。はい、復唱」

「うぅ……。僕は、楠さんを、無理やり部屋に連れ込みました……」

「はいご苦労様」

そう言いながら何かを機械を取り出す。そしてそれをごそごそといじると。

『僕は、楠さんを、無理やり部屋に連れ込みました』

機械が僕の声を再生していた。

「って、録音してたの？！」

「そうだけど。それほど驚くことでもないでしょ？　初めて見た？　ＩＣレコーダー」

「ＩＣレコーダー初めて見たけど、その前になんで録音なんかするのっ！」

「脅すネタを増やすためだけど。そんな当たり前の事聞かないでくれる？」

な、なんていう美少女なんだ……。僕達は今までとんでもない勢いで騙され続けていたみたいだ……。猫被ってたとか、そんな言葉じゃあ足りないよ。でもいい表現が思いつかないから猫をかぶってたとしか言いようがないんだけど……。

まあいいや。
撫で続けられた楠さんの髪はセットしたばかりのように整っていた。すごい潤いヘアーだなぁ。
ベッドにへたり込み楠さんの黒い髪に見とれていると、ずずいと顔を寄せられ至近距離で見つめられた。くりくりとした大きな瞳に僕の顔が映し出されている。映し出されたその顔は何とも情けない男らしさとは無縁の顔だった。っていうか、綺麗な肌が近すぎて僕の顔が真っ赤だよ！

「ねえ」

「な、なんですか……」

また怒られるのかな……。

「とりあえず、着替えようか」

「え、あ、うん……」

パジャマじゃダメなのかな……。
僕はベッドから降りてタンスを開ける。服を取り出し気付いた。振り向き楠さんを見てみる。ベッドの上にアヒル座りをしてばっちりこちらを見ていた。

「……あ、その、楠さん……、その、見ない方が、いいんじゃないかな……」

「ああ、そう。恥ずかしいんだ。顔もそうだけど性格も女の子みたいだね」

そう言って僕に背を向けてくれた。
そ、そんなの、可愛い子に見られてたら恥ずかしいに決まってるよ……。僕も背を向けて着替えを始める。
ささっと下を着替えて、上を脱いだ。が、その時、
ぱしゃ。
と、聞きたくない音が聞こえてきた。
上を着ないまま振り向いてみる。そこには当然携帯のカメラを構えた楠さんが……。
急いでシャツを着て猛然と抗議をする僕！　当然だよ！　今回ばっかりはちょっと強めに言っちゃうよ！
「そ、その、な、なんで、写真なんか……」
「部屋に連れ込んだ君が服を脱いで私を襲おうとしている証拠」
「そ、そんな……！」
「君サイテー。か弱い女の子を部屋に連れ込んでこんなことをしようとしているだなんて」
「してないよ！　する気も無いよ！」
「する気も無いって、それ失礼でしょう。ふざけてんの？」
「う……」
確かに失礼だった……。
「訂正して」

「え、え？」

「いやらしいことする気はありましたと、訂正して。さあ、ほら早く」

「う、うぅ……」

た、確かに、今のは楠さんを傷つけてしまったかもしれない……。ここは素直に訂正しよう。

「……そ、その、僕はいやらしいことする気がありました……」

え？　あれ？　そんな気はもともと持ってなかったから訂正する必要なかったような……。

「はい録音」

「え？！」

「当然でしょう。君頭悪いの？」

う、うううううううううう！

諦めよう。僕はもう社会的に死ぬんだ。

「はぁ……」

「怒らないんだね」

「うん。僕が悪いし……」

「……」

「僕が気を付けておけば防げたことだから楠さんに文句を言うのは間違っている……のかな？」

「知らないよ」

だよね……。

うなだれる僕に楠さん。

「ねえ佐藤君」

「な、なに？」

「なんで君はそんなに遠慮してるの？　私はこんなに心を開いているのに君はずっと閉じたまま。なんかムカつくんだけど君の愚行をみんなにばらしていいの？」

「そ、そんな……。そんなこと言われても……。僕なんかが楠さんになれなれしく話すなんて許されることじゃないし……」

「何それ。脅してくる奴相手にへりくだるって君どれだけマゾなの」

「ま、マゾじゃないけど……。本当のことだし……」

「……私が心を開いているんだから佐藤君も心を開くべき」

「え、で、でも」

「でももしかしもない。ばらすよ」

……本当に僕は脅されています……。

「わ、分かったよ。本音で、接します」

「約束だから。じゃあそう言うわけで、佐藤君朝ご飯まだでしょう。食べてきていいよ」

「え、楠さんは？」

「私は食べたよ。そもそも忍び込んだんだからご家族の方と一緒にご飯は食べられないでしょ。さっさと一階へ行ってご飯食べてきて。そのついでに何か飲み物を持ってきて。君と私の分二つね。できればお茶」

「う、うん。じゃあ、僕は、ご飯を食べてくるね」

「はいはい」

僕を脅していると言っても、やっぱり楠さんは優しいなぁ。

朝の食卓は平和で幸せだった。家族みんなで食べるごはん。おいしいよね。

ご飯を食べ終え、お盆の上にお茶を二杯乗せて二階へ上がる。なんで二杯持っていくのかお姉ちゃんに怪しまれたけど僕の部屋にお

茶好きの幽霊がいるんだと言ったら納得してくれた。
自分の部屋だけれども、楠さんがいるのでノックをしてから入る。
「入るよ？」
ゆっくりと扉を開いて中を覗くと楠さんが堂々と部屋をあさっていた。
「あれ？　探し物？」
何も隠していないけれど。
「……その反応を見ると、別にエロ本とか隠していないみたいだね……」
「え、エロっ……！　そんなのないよ！　そんなの探さないでよー！」
「……本当に男なのかな……。情けない声出してみっともない」
ぶつぶつと言いながら楠さんが勉強机から椅子を引っ張ってきて座る。
「うう……。よく言われるよ……」
僕はお茶の乗ったお盆をテーブルの上に置いてそのまま床に正座をする。テーブルの上に空のタッパが置いてあるけどなんだろう？
「佐藤君本好きなんだね」

「え？　あ、うん。好き」
「漫画本とかが多いね」
「うん」
「アニメも見るんだ」
「うん」
「オタク？」
「う、うーん、オタクの人から見たらオタクじゃないと思うけど……」
「じゃあオタクだ」
「……サブカルチャーに全然興味がない人から見たらオタクかも」
「オタクなんだ」
「あ、その、楠さんよりは……」
「オタクなんでしょう？　言い切ってよ。ウザい」
「は、はい。僕はオタクです……」
ウザいって言われちゃった……。あの楠さんにウザいって言われちゃった……。

「今度からはすぐに答えてよね。何度も聞き返すの面倒くさいから」
「あ、うん……」
怒られちゃったよ。
「なにかおすすめとかある？」
「おすすめ？」
「面白いアニメとか、漫画とか」
「あ、えーっと……。楠木さんは、その、どんなのが、好み……なのかな」
「うーん。平和なの」
「平和なの、なら……。そこにある、とある女子高の軽音楽部っていうのが平和で面白いよ」
ふーん、と興味なさげに呟いて椅子をくるくる回す。興味ないのなら何で聞いたんだろう……。
椅子の回転をピタッと止めて僕を見る。
「それで、君は男の情事やらをどうしているのかな？」
情事？　情事ってそういうことかな……？　……はぁ？！
「な、なな何を突然言っているの？！　何を言っているの？！」

「繰り返さなくても聞こえているから。で、どうしてるの？」

「ししし知らないよ！」

「……まあ、いっか。ただの興味本位だし」

「う、うううう……」

なんか強いよ、この人……。

「ああ、そうだ」

「な、なに？」

声をかけられる度に怖いよ……。なんだか調教されている気分だ……。

「色々と部屋を調べさせてもらったんだけど、タダで探すのは申し訳ないと思ったから調べた個所に代金としておはぎを置いといたから」

「おはぎ？！」

「ほら、ベッドも調べさせてもらったからそこに」

楠さんが指さす方、僕のベッドの上を見るとおはぎがその肌を剥き出しのまま銀紙の上に鎮座していた。

「や、やめてよー……。蟻が来ちゃうよー……」

「嬉しくないの？」

「嬉しくないよー……」

「あれそれは残念。合計九個おはぎを隠したのに喜んでもらえないなんて」

「九個！？　結構多いよそれ？！」

「まあいいや」

「僕はよくないよ！」

「なら探しておはぎたちを助け出せばいいと思います。その間私はここにある君のパソコンをいじらせてもらうから」

「う、うぅ……」

どうやらおはぎの生息地は教えてくれそうにないね……。仕方がないので、僕は一人おはぎ探しをすることになった……。机の上のタッパはおはぎを持ってきた入れ物だったんだね……。

そして僕は無事に全九個のおはぎの救出に成功した。タンスの中、押し入れの中、引き出しの中、カバンの中……。色んなところにちりばめられたおはぎを探し終えたとき、僕はまるでドゴランボールをそろえたかのような気分になった。願い事が一つ叶うのかな？

そうだとしたら何を願おうかな！　身長も伸びてほしいしおいしいものも食べたいし。でもやっぱり一番欲しいのはパソコンソフトの終音ミコが欲しいかな。歌を作ってニヤニヤ動画に投稿したいな。

おはぎを見つけ終え楠さんの後ろで正座をする僕。

「ねえ佐藤君」

おはぎ事件に対して特に反応も見せずディスプレイを見つめたまま楠さんが聞いてくる。

「どうしたの？」

「エロ画像はどこにあるの」

「エロっ……！　そ、そんなのないよ！」

「君は聖人ですか。三大欲求の一角を担っている性欲が佐藤君には無いの？」

「そん、そんなの気にしないでよ！」

「……まあ、脅せば済むことだけど、別に処理の仕方が気になっているわけじゃないからいいや」

なら聞かないでよ……。

「それで佐藤君」

「な、なに？」

「このパソコンは何のために使ってるの？　Ｄドライブの中身が空っぽなんだけど、エロ画像もエロ動画も見ないなんてパソコンとしての役割が果たせていないでしょ。これじゃあただの暖房器具じゃない」

「僕パソコンを駆使しているわけじゃないからパソコンの事全然詳しくないけど、パソコンってそんなえっちなものじゃないと思うよ……」

「パソコンを個人で所有している人の９９パーセントはエロ目的でパソコンを買っているの。君が残りの１パーセントだとは思えないから君はエロス。うちの兄もエロス」

「お兄さんがいるんだね」

楠さんが大きな瞳で僕を睨み付けてきた。

「ちょっと。なんで私の個人情報を知ってるの。もしかして私のこと調べてたの？」

「え、い、今自分で……」

「録音するから調べてましたって言って」

「とうとうオープンに録音しだした！　これじゃあどんな言葉でも人質に取られちゃうよ！」

「そうだね。なら『楠さんに酷いことをしました』って言って」

「い、言わないよ！」

「……自棄になられても困るし、無理な注文はやめておこうか」

「そ、そうしてくれると嬉しいよ……」

「感謝してね」

「う、うん」

感謝しなきゃね。

「それで、この暖房器具は他にどういう機能がついているの？　エロ画像を見る機能はつけていないみたいだけど」

暖房器具扱い……。

「僕の場合はニヤニヤ動画とか見たり、２・１ちゃんねるを見たりしてるよ。だから用途としては暇つぶしかな？」

「ふーん。暇つぶしね」

カリカリとホイールを回す楠さん。

「私さ、思うんだけど」

「うん」

「インターネットしてたらよく見る、（※ただしイケメンに限る）ってあるでしょ？」

「うん」

「あれさ、逆バージョンの方が該当ケース多い気がするんだよね」

「逆バージョンってどういうこと？」

「（※ただし美少女に限る）っていうこと」

「？」

やっぱりよく分からなかった。

「もしかしたら私の勝手なイメージなのかもしれないけどさ、デブで暗い男と、デブで暗い女を比較した場合、デブで暗い男の方がポイント高い気がするの」

「……ご、ゴメン。よく分からない……」

「たとえばね、デブ男がカラオケに行きました。歌がうまい。デブ夫のくせにやるじゃんってなるでしょ？」

「う、うん」

「でもね、デブ美がカラオケに行って歌がうまくても、それはただ気持ち悪いだけなんだよ」

「え゛……。そ、そうかな……。すごいと思うけど……」

「歌がうまい（※ただしイケメンに限る）は無いけど、歌がうまい（※ただし美少女に限る）はあると思うの。ブ男には適用されない

けど、ブ女には適用されるケースが多い。そう思うのは私だけかな」

……多分、楠さんだけだと思う。

「女性歌手の殆どはビジュアルがいいでしょ。でも男性歌手はそうでもないのもいるでしょ？」

う、うーん……。なんて言うか、同意しづらい……。

「その、あの……」

「言いたいことがあるならはっきり言ってよもやし太郎」

も、もやし太郎……。キャベツ〇郎みたい。

「心を開くって言ったでしょ。もう約束破るの？　なんだ、君、無理やりキスしたことみんなにばらしたいんだ」

「そ、そんなことないよ！」

「なら言ってよ」

怖いです……。言うよ、言いますよ……。

「う、うん。あのね、人を見た目で判断するってよくないと思う……」

「へー。君は見た目で判断しないの？」

「し、しないよ」

「なら私を特別視してない？　クラスで一番可愛い私を少し高い位置においてない？」

う。それは、ちょっとあったかも……。

「で、でも、楠さんは本当に何でもできるし親切だから尊敬するのは当然だよ」

「ビジュアルが論外でも？」

「う、うん。それは、そうだよ。関係ないよ」

「……へぇー。まあ、そう言えば君はその他大勢の男子と違って私にまとわりついてこないもんね。」

「う、うん」

「本当に男なのかな」

「一応……」

「男ならシャキッとしなよ。どうでもいいけど」

どうでもいいんだ……。まあ、そうだよね……。

「……あ、そう言えば……」

聞きたいことがあったんだった。

「なに？　何か気になることでもあるの？」

「そ、その、聞いてもいいかな」

「内容を言わないでそんなことを聞かれても」

「そ、そうだよね。あの、あの山での出来事について聞きたいことがあるんだけど、聞いてもいいかな」

「脅すネタを増やそうっていうんだね。別にいいよ、かかってきなさい」

そんなつもりじゃないのに……。

「あの、あそこで何をやっていたの？　怒っているように見えたけど……」

「何言ってるの。私の言葉を聞いていたでしょ。ああ、また私の口から言わせたいんだね。すごく陰険。ますます君のことが嫌いになっちゃった」

う、うう……。もっと嫌われちゃった……。でもしょうがないよね……。僕が悪いんだから。

「私はいつもあそこでみんなの悪口を言ってるの。人と話すだけでストレスたまるからさ。あの日は一緒にデートした井上先輩のことについてイライラしてた」

「あ、井上先輩って言ったらかっこいいことで有名な先輩だよね。さすが楠さん。井上先輩にデート誘われるなんてすごいよ」

「何それ嫌味？　イライラしたって言ってるじゃんか。あいつ触るなって言ったのに私の体べたべた触ってきやがって……！　今思い出してもイライラしてくる！」

ここに来て初めて感情を見せてくれた。けどそれが怒りなのが少しいやかなり悲しい。

「あああああああああああ……！　気持ち悪い……！」

キーボードをガンガン叩く楠さん。

「あ、その、やめてほしい……んだけど……」

「何が？！　何を！」

「いや、えっと、キーボードを、壊すのを……」

「……ならこんなところに置いておかないでよ」

「で、でも、キーボードなんだからパソコンにつないでおかないと……」

「すぐそれ。触られたくないのなら人目につかないところに置いておけっていうの」

う、うう……。そんなの間違ってるよ！

「うう……」

「喘がないでよ気持ち悪い。もしかして私の後ろ姿で情事を済ませたの？　気持ち悪いから学校やめて」

「そんなことしてないよ！」

「あっそう。疑ってごめんね。お詫びにエロ動画ダウンロードしておいたから」

「ええ？！　いらないよっ！」

「いらないの？　ふんどしの男たちがぶつかり合う動画いらないの？」

「ますますいらないよ？！」

「あれ。一応異性に興味があるんだ。男色かと思ったのに違うんだね」

「違うよ！　勘違いも甚だしいよ！」

甚だしいっていう言葉を初めて使ったよ！

「なら私は女の子が大好きですって言ってよ」

「ＩＣレコーダーを構えながら言わないでよ……」

「ばれたんだ。ばれないかと思った。佐藤君だから」

「僕目悪くないけど……」

「察しは悪いでしょ」

う、そうかも。

「あーあ。今日の収穫は少なかったよ」

「しゅ、収穫って、何？」

「もちろん君を脅すための材料に決まってるでしょう。致命的なものがまだないからね。エロ画像でも見て佐藤君の趣味を把握しておこうかと思ったんだけどどうやら君は聖人君主みたいだからうまく行かなかったよ」

そんな理由で僕の部屋に来たんだ……。

「まあいいや。とりあえず君のパソコンの中にガチムチ動画が入っているのを写真に収めさせてもらったから」

「そんな！　それ楠さんが自分でダウンロードした動画だよ！？　僕の趣味じゃないよ！」

「そんなの関係ない。現に君のパソコンの中に動画が入っているんだから。言い逃れはできないよ」

ひどすぎる……。

僕はぐったりうなだれた。僕はどうやらいじめられるみたいです。

「あ、お茶貰うね」

椅子を回し手振り返り、お茶に手を伸ばした楠さん。

「……」

だけれども、お茶を握って動きを止めた。

「どうしたの？　楠さん」

「……君、このお茶の中に何か薬入れたでしょ」

「そんなことしないよ……。そもそも薬なんか持ってないよ……」

とても心外だ。でも疑われる僕が悪いんだろう。

「なら、僕が先に飲めばいいよね？」

「そうだね」

すごく警戒しているなぁ。でもしょうがないよね。初めて訪れる部屋なんだから。

僕は傍にあったコップを手に取り、口へ近づけた。が、

「ちょっと待って。そっちじゃなくてこっちを飲んで」

「え？」

「そっちには何も入ってないかもしれないし」

「う、うん……」

すごく警戒しているよ……。

楠さんに近い方のコップに持ち替えて僕は一口飲んだ。

「……問題ないみたいだね。じゃあありがたくいただくよ」

お茶とおはぎを持つ楠さん。

「うん。おいしい。佐藤君も食べていいよ」

「え？　ありがとう。じゃあ……」

「あ、旗が刺さっている奴を食べてね」

「うん」

残り八個のうち旗が刺さっているおはぎは一つ。僕はそれを手に取り一口食べた。驚くほどおいしかった。

「……」

何故だかその様子をじっと見つめている楠さん。なんだろう？

あ、そっか。

「おいしいおはぎだね」

きっとこう言うことなんだよね。

「そんなことはどうでもいい」

……どうでもいいんだって。でもおいしいのは本当だからすぐにペロリだよ。

「……くふ」

楠さんが笑った。暖かくない笑みだった。

「ど、どうしたの？」

「それには下剤が入っています」

「……え？！」

なんてこった！

「ひ、酷いよ！　なんでこんなことするの……？」

「言うことを聞かせる為に」

ど、どういうことだろう……。

「う……早速お腹が痛くなってきた気がする……」

下剤の効きが早い気がするけど、多分これは僕のメンタルが弱いことによる思い込みだと思う。

「ちょ、ちょっとトイレに行ってくるね」

立ち上がり、ドアへ向かうが、

「待って。待たないと大声で泣くから」

「え……？　ま、待つから、待つからやめてね」

ドアの近くに腰を下ろす。そんな僕を椅子に座った楠さんがにやにやと眺める。

「さて、佐藤君のお腹がエマージェンシーモードなわけですが、君がトイレに行けるかどうかは私にかかっています」

「うん……」

「トイレに行きたければ私の言うことを聞きなさい」

「うん」

自分の命の為だからしょうがないよね。

「とりあえず馬を返して。この部屋にあるんでしょ？」

「え、ないよ？　その、さっき部屋を探したときに……その、無かったよね」

「無かったけど。どこかに隠しているんでしょ？」

「隠してないよ。僕本当に知らないんだ」

「……本当かな……。怪しいね」

「ほ、本当だよ……」

「あとで嘘がばれたらひどいことになるからね。馬を隠すメリット

はないよ」

「う、うん。僕、馬持って帰ってないよ」

「……信じましょう」

「あ、ありがとう！　じゃあ、ちょっと……」

「まだ用事は終わってないからその上げた腰を下ろして」

「え、あ、はい」

「とりあえず次は誓約書にサインをしてもらおうかな」

「誓約書？」

カバンに手を突っ込み一枚紙を取り出した。

「これに目を通さずサインして」

「め、目は通させてもらうよ……」

紙を受け取り、手書きの誓約書の内容を確認してみる。

えっと？

その一・あの日見たことを口外しないこと。

その二・私、楠若菜の言うことに逆らわないこと。

その三・人前では自然に接すること。

その四・ってゆーか転校して。

「四つ目は無理だよ！」

「え？　漏らしたいの？　それとも家族からの信用を無くしたいの？」

「どっちも嫌だけど転校するのも嫌だよ……。あの、他の三つは絶対に守るから最後の一つは許してくれないかな……。お願いします……」

「……そんな悲痛な表情で頭下げられたらまるで私が嫌なことしているみたいじゃない。やめてよ」

「ご、ごめんね」

「……」

何故だか分からないけれども楠さんの目に不快の色が映った。

「え、ど、どうしたの？」

「……なんでもない。分かった。じゃあ四つ目は勘弁してあげる。でも消すのが面倒くさいからとりあえずそのままサインしちゃって」

「うん」

ペンをとり紙に名前を書く。さとう、ゆうた……と。

「はい」

「……ありがとう」

受け取る時にも不快の色が見えた。僕、何か悪い事したのかな。受け取った誓約書を眺め、一度溜息をつく楠さん。僕にはその溜息の理由が分からなかった。

「……お腹の具合はどう、佐藤君」

「うん……あんまりよくない」

ごろごろと警報が鳴っているよ。

「行ってきていいよ」

「あ、うん。じゃあちょっと行かせてもらうね」

やっとスッキリできるね！

僕はちょっと失礼してトイレに行かせてもらった。

十分後か十五分後かはよく分からないけれど、トイレにこもり用を済ませ部屋に戻ってきたとき、楠さんは一枚の手紙を残して部屋からいなくなっていた。

「えっと……」

残された手紙を読んでみる。

「『帰る。おはぎ食べていいから。下剤入りは旗が刺さった一つだけ。おじゃましました。』」

……。

激動の朝だったね。

学校の屋上は聖地

激動の土曜日を終え日曜日は何事もなく過ぎてゆきいつも通りの月曜日がやってきた。
あ、いつも通りじゃなかった……。
僕が教室に入ったら、黒髪ロングの美少女が笑顔で挨拶をしてくれた。
「佐藤君！　おはよう！　今日も一日頑張ろうねっ！」
男子数名と話していた楠さんが僕に向かって手を挙げてくれた。
「あ、お、おはようございます」
「あはははは。やだなぁ、なんで敬語なの。クラスメイトなんだから親しくしようよ、ねぇ？　さ　と　う　く　ん？」
「う、うん……」
いつも素敵だと思っていた笑顔が今は裏にある感情を想像してしまって素直に見惚れることができない。残念でなりません。
僕はぎこちない笑顔を作って楠さんをやり過ごし自分の席へ向かった。
席へついて一度辺りを見渡してみた。男子数名が「なんでお前なんかに若菜ちゃんが挨拶してるんだよ死ね」というような目で僕を見ていた。僕は気付かないふりをして文字の世界に飛び込んだ。
しばらくして教室に先生がやってきた。僕は本をカバンの中にしまって姿勢を正した。

「みんなおはよう」

先生の声が静かな教室に響く。

「あー、今日の放課後暇な奴いるか？」

先生が教室を見渡す。でも誰も反応しない。

「……じゃあ、佐藤」

「え、ぼ、僕ですか？」

「佐藤部活してないしな。佐藤しかいないんだ」

この前もそんな理由だったよ……。

「草むしりの人間を一人出さなきゃいけないんだが、佐藤やってくれないか」

「あ、は、はい……」

今日も晩御飯作れないのかな……。

うなだれる僕に関係なく朝のホームルームが続けられる。連絡事項を伝え終えた先生が教室を出て行った。

草むしりか……。この前より早く帰れればいいな。

「佐藤」

「え？　あ、有野さん。おはよう」

「お前嫌なこと押し付けられすぎじゃね？　嫌なら断ればいいじゃねえか」

「え、で、でも、僕にしかできないし……」

「んなもん適当に断っとけば若菜か誰かが買って出てくれるだろ。佐藤何度も嫌な仕事押しつけられてんじゃんか。あいつ絶対お前の事便利な奴だと思ってんぞ。嫌だろ？」

「え、ううん？　その、僕がやればみんな困らないし、全然かまわないよ」

「あんた……優しすぎだろ」

有野さんが僕のほっぺたを軽く抓って引っ張ってきた。

「ご、ゴメンなさいぃ」

「悪くねえのに謝んなよ」

怒った顔をして、うにうにと僕のほっぺたを引っ張たあと自分の席に戻って行った。よかった。殴られるのかと思った。

お昼。

「佐藤君」

お弁当を食べようとカバンをあさっているところに、いい匂いとともに黒い髪が視界に入ってきた。お弁当を持ってその人を見てみる。

う……。楠さんだ……。

「佐藤君？」

「な、何？」

「あはは。そんなに怯えないでよ。クラスメイトでしょ」

「うん……」

確かに何もされていないのに怯えるのは失礼だよね。気をつけなきゃ。

「それで、何か用かな……」

「一緒にご飯食べようかと思って」

「えっ」

と僕が驚くのと同時に教室内がざわめきに包まれた。

当然だよ。僕のようななよなよした人間が楠さんのような凛々しい人間と昼餉をともにするなどと恐れ多いにもほどがあるよ。

さらにそんなことよりも重要なことで、そんなことをしたら男子全員から冷たい目で見られてしまうと思うんだ。

「えっと、その、あの、僕」

「え？　もしかして、私とご飯食べるのが嫌なのかな……」

とても悲しそうな声だった。でも顔は無表情に怒っていた。

楠木さんは教室にいるみんなに背を向けているので、みんなは楠さんが怒っているとは思わない。僕が悲しませているように見えているはずだ。その証拠にクラスの大部分から熱い視線をもらっているよ。

「なにか嫌な理由でもあるのかな……」

顔と声が全然合ってません……。怖いですよ……。

「佐藤君が嫌ならいいんだけど……残念だな」

楠木さんの後ろからとても重量感のある視線をびしびしもらっているわけだけどそれは僕には耐えられるようなものじゃないんだ。だから楠さんの言うことに従うことにするよ。

「う、うん。ご一緒させていただきます」

「え、いいの？　ありがとう！」

ちなみにまだ無表情です。怖いです。

敵意のこもった視線を体中に感じながら僕は楠さんについて教室を出て屋上へ向かった。

屋上へ着くなり僕の胸ぐらをつかんで顔を近づけてくる楠さん。

「……誰かに言ったでしょ」

「い、言ってません」

「嘘つかないでよ。こんな楽しいこと誰にも話さないわけない。話す友達がいないなら別だけど」

「う……」

あれ……。今日、まだ男子の誰とも話してないや……。親友はいないけど友達くらいいるよって思ってたけど、友達もいないのかな……。

「……もしかして佐藤君、君友達いないの。……ま、しょうがないか」

しょうがないみたいです……。

「よかった君に友達がいなくて」

「うう……」

悲しいです。

「ねぇ、孤独な人生を送っている佐藤君」

「そ、そんな呼び方やめてよ……」

「そう言えば今までずっと一人でご飯食べていたね。よかったね、今日はこの私とお昼一緒できて」

「うん。本当だね」

「……」

イラッとされた。

「ご、ごめん」

「……別に怒ってないから謝らなくてもいい。それで、君、今日はいつも通り過ごすことができた？」

「うん。大丈夫だよ。楠さんのことも誰にも言ってないよ」

「当たり前でしょう。恩着せがましいこと言わないでよ」

そんなつもり無かったのに怒られてしまった。僕の配慮が足りないせいだ。

「じゃあさっさとお昼を食べて佐藤君と別れよう」

早く僕と別れたいみたいだ。急いでご飯を食べよう。

屋上の端に座る楠さんを追って、僕も屋上の端に座った。楠木さんとの距離は人三人分。近すぎたら馴れ馴れしいと思われるし、離れすぎても失礼な気がする。だからこれくらい。

「佐藤君のごはんおいしそうだね」

「え？　あ、ありがとう。楠木さんのもおいしそうだね」

「おいしいよ。あげないから」

「う、うん……。あ、そうだ。おはぎありがとう。おいしかったよ」

「あたりまえでしょ。私が作ったんだから」

「え、手作りだったんだ。すごいね！　あんなにおいしいおはぎを作れるなんて羨ましいよ！　どうやって作ったの？」

「興味もないのに作り方聞いたり無理して褒めたりしなくてもいいよ。おいしいのは分かってるし」

「あ、ごめん……。で、でも、全部本当だよ……」

「へぇ。料理もしないくせに作り方が気になるって？」

「あ、ぼ、僕、その、時々、料理とか、するんだ。このお弁当も手作り」

「へえ……。それ結構すごいね。多分自分でご飯作っている男子はこの学校で佐藤君くらいだよ。それは誇っていいと思う」

「そ、そんなこともないんじゃないかな……」

「あっそう。そう思うんならそうなんだろうね」

う、ちょっと不快に思われたみたいだ。ごめんね。

「もしかして佐藤君お母さんがいないの？」

「え？　ううん。両親とも健在だよ」

「ならどうしてご飯なんか作ってるの？　作ってもらえないの？」

「両親とも、共働きだから。できる事は自分でやろうと思って」

「へぇ。それは偉いね」

「そんなこともないんじゃないかな……」

「あっそ」

しまった。また怒らせてしまった。どうやら楠さんは褒め言葉を素直に受け取らない僕にイライラしているみたいだ。気をつけよう。

「あ、そう言えば。佐藤君が言ってた、とある女子高の軽音楽部、私の兄も持ってたから見てみたよ」

「え？　あ、うん。面白かった？」

「面白いかどうかは別として、商売上手だと思った」

「商売上手？」

「私がそれを見ているときに兄が暑苦しく説明してきたんだけど、とある女子高の軽音楽部を制作している郷土アニメーション、だっけ？　そこってエンディングに踊るアニメを手掛けたらしいね」

「うん。春宮スズヒの爽快だね」

「それそれ。キャラクターソングとかもたくさん出して、アニメから作られる副産物で結構稼いでいるみたいだね」

「へぇー。そうなんだね」

「そうらしいね。それで、その時に副産物で稼げると分かった郷土アニメーション。だから今度はその副産物自体を物語に組み込んだというわけだよ。たくさんCD出しているんでしょ？」

「う、うん」

「あーあ。つまり君はまんまと騙されているんだよ。郷土アニメーションが副産物を作るのに適した漫画を見つけて、それをアニメにして、歌を作って、君が買う。完璧にやられているね」

「そ、そうなのかな……」

「そうなの。あれは企業の策略の元に作られたものなんだよ。どう？　面白いと思っていたアニメにこんな裏があると分かった気分は。残念？」

「え？　う、ううん……。別に、そんなことも……」

いきいきと話していた楠さんが、途端に不機嫌そうな顔を作った。

「……なんで」

「え、だ、だって、面白いのは本当だし……。そもそも、面白いものじゃなきゃ、誰もCDとか買わないんじゃないかな」

「……まんまと騙されやがって、って思われていてもいいの？　嫌じゃないの？」

「うん……。面白いから、買ったんだもん」

「……なにそれ。がっかり」

「え、え？」

「君をがっかりさせるためにわざわざ聞きたくもない話を兄から聞いたのに、何それ。佐藤君面白くない」

「え……。ごめんね……」

「……」

う。謝ったらさらに楠さんの怒りゲージが溜まったみたいだ。よく分からないけれどもう謝るのはやめよう。

「話は変わるけど」

「あ、うん」

「ずっと疑問に思っているんだけど、なんで電車の中で電話しちゃいけないのかな」

「え？　それは、他の人に迷惑がかかるからじゃないのかな……」

「迷惑って、話すことが迷惑なら会話自体を禁止すべきでしょ」

「あ、僕聞いたことがあるよ。誰かが電話をしているとき、他の人はその電話の向こうの相手の声が聞こえないからそれを想像してしまって、そのせいでストレスを感じてしまうんだって」

「それは私も知ってる。偉そうに言わないでよ」

「あ、ごめん……」

「……。で、そのことなんだけど、そんなの禁止にする理由にならないと思うんだよね。その程度のことを迷惑と言うんだった、携帯の話声なんかよりもっと迷惑なことだってあるんだから、それらを一々禁止していったら人間はまともな生活できなくなっちゃうよ。例えば、お風呂に入らない人は臭いがきついので人のいるところに行かないでくださいとか、挙動不審な人は目障りなので人目につかないように歩いてくださいとか。そんなルールがあったら困るでしょ？　携帯電話なんかよりも、臭いのきつい人の方が迷惑でしょ？　だからと言ってそれを禁止にはしないでしょ？　だったら、なんで携帯電話は禁止にするの」

「うん……」

そうなのかな……？

「なに？　言いたいことがあるなら言ってよ。心を隠さないって約束でしょう」

「あ、うん。その、大勢の他人と空間を共有する電車の中だから、えっと、逃げ場がないというか、自分ではどうすることもできないというか……。お風呂に入らない人がいるのなら近づかなければいいし、動きが気になる人を見かけて嫌だなと思ったのなら目をそらせばいいし……。でも電車の中で電話をされたら防ぎようがないというか……」

「じゃあ電車の中に臭い人がいたらどうするの」

「う。……移動する」

「なら電話も移動すればいい」

「……そうだね……」

「臭い人は電車に乗っちゃいけない？　ワキガのお客様は乗車ご遠慮願いますとでもいうの？」

「……そんなこと、言えないね……」

「でしょう。それに比べて電話なんて軽いものだよ。だから、不快にならないように、聞こえないくらいの小声で話してくださいってことにすればいいんじゃないの？」

「えっと……それは、どうなのかな……よく分からないけど……」

「『車内での通話は他のお客様の迷惑になりますので電源を切るかマナーモードにしてください』って言うけど、小声で話すなら別にかまわないんじゃないの？」

「えっと……、あ、そうだ。ペースメーカーとか、そういう大切な機械に影響が出ちゃうんじゃないかな」

「ならその人は街を歩くだけで死ぬよ。電波で溢れているんだから」

「あ、そ、そうかも……」

「つまり、電車内で携帯を使ってはいけない理由はよく分からないのにみんなマナーだマナーだ言ってるんでしょ。おかしいよそれ」

「そう、なのかな……」

「そもそも会話の一方だけが聞こえてくることが不快だなんていうけど、盗み聞きするのもよくないと思うし、その会話を理解しようとするのも意味が分からない。聞き流せないの？」

「……ごめんなさい」

「謝らないでよムカつくから。で、他の国がどうだからっていうわけじゃないけれど、参考までに、禁止しているのは日本くらいなんだよ？」

「え、そうなの？」

「そうなの。変だね」

「うん。それは、ちょっと変」

「流されやすい日本人が、なんでこんなところで独自のルールを作っちゃってるんだろうね」

「不思議だね」

深く考えたことないや。すごいなぁ、楠さんは。

「さて」

楠さんが立ち上がった。

「ご飯も食べ終わったし、私はもう行くから」

「え、あ」

いつの間に。僕のお弁当箱の中にはまだたくさんご飯が残っていた。話に夢中で箸が止まっていたみたいだ。

「ごゆっくり」

さっさと屋上を出て行った。

少しの間だけでも、楠さんとご飯を一緒できたのは嬉しいことだね。

青空の元、僕は一人笑顔でお弁当を食べた。

金髪なだけで怖い

放課後になった。帰りのホームルームが終われば草むしりだ。早く終わらせよう。

「席につけー」

いつも通りにホームルームが始まり、いつも通りに進む。

「えーっと、じゃあ、佐藤。この後草むしり忘れるなよ」

「あ、はい」

「誰か暇な奴がいたら手伝ってもいいからな」

暇な人がいないから僕になったんじゃないのかな……。

「はい。私が手伝います」

誰かの、綺麗で、嘘みたいに透き通った、とても聞き取りやすく、すぐに耳になじむ声が教室を震わせた。

その人は、背筋をぴんと伸ばした姿勢で椅子に座り、傷一つないどころか汚れ一つない真っ白な手を挙げていた。座って手を挙げているだけで他の生徒とは違う空気を醸し出せるその人は、当然、

「……いいのか？　楠。服が汚れるから男子に頼もうと思っていたんだが」

「はい。服が汚れる事なんて誰も気にしませんよ？　そんなことよ

りも、佐藤君一人に仕事をさせる方が気になります」
「おお、さすが楠だな。お礼を言っておけよ、佐藤」
「は、はい」
「じゃあ、よろしく頼んだぞ」
帰りの挨拶後、僕はすぐに楠さんに駆け寄った。
「楠さん……」
「ん？　なに？　佐藤君」
「あの、ありがとう。手伝ってくれて」
「別にいいよー。一人でやるより二人でやった方が早く終わるからねっ！」
「う、うん」
やっぱり、楠さんは一般人のレベルを軽く超越した可愛さだなぁ……。
見惚れていた僕だったけれど、誰かに突き飛ばされて正気に戻った。
「若菜ちゃん、俺も一緒にやるよ！」
僕を突き飛ばしたのはバスケ部の小嶋君だった。このクラスの男子リーダーの沼田君に続く、ナンバー2の人だと思う。

「え、そんなわるいよ。小嶋君部活があるでしょ？」
「ちょっとくらい遅れたって大丈夫だって！　すぐ終わるすぐ終わる！」
「……なら、お願いしちゃおうかな」
「任せろ！」
楠さんが立ち上がり、小嶋君と二人で楽しそうに笑いあいながら教室を出て行った。僕はと言えば突き飛ばされたことに驚き少し呆けて動けなくなってしまっていた。
尻餅をついたまま、ぼうっとしている情けない僕を、誰かが後ろから引き起こしてくれた。
「何してんだよお前」
黒髪美少女の楠さんと女子のトップを争っている金髪美少女の有野さんだった。
有野さんが怒ったような顔で僕を見ている。手間をかけさせてしまって、申し訳ないよ……。
「あ、ありがとう。ごめんね」
「何も悪くねえだろ。小嶋の奴、最悪だな」
「え？　どうして？」
「はぁ？　どうしてって、お前……。……まあ、佐藤が気にしてな

いのならいいや。……にしても、あの担任、うぜぇな」

「え？　ど、どうして……？」

同じ言葉を繰り返しちゃった……。怒られるかもしれない……。

「何が若菜にお礼いっておけよだ。別に佐藤が自分で作った仕事じゃねえんだから佐藤が若菜に礼を言うことじゃねえだろ」

「でも、僕が頼まれた仕事だし、一人でやらなきゃいけないことだし……、手伝ってくれるのならお礼を言わなくちゃ……」

「だぁかぁらぁ、礼を言うのは担任だろ。あいつが押し付けた仕事なんだからよ」

「そ、そう、かな……。で、でも……」

「んな顔すんなよ。別にお前にキレてるわけじゃねぇから」

そう言って、優しい笑顔を見せてくれた。

「あ、ごめんね」

「怒ってねえから謝んなっての。じゃあ、頑張れよ」

ぺちぺちと、頬を二度叩かれ教室から送り出された。

有野さんも優しいなぁ。女子が魅かれる理由がよく分かるよ。でも楠さんとはあまり仲が良くないんだよね……。悲しいことだね……。

僕ははっきりと好き嫌い言う所は好きなんだけどな。裏表のない

性格っていうのかな。凄いことだと思う。
……でも、僕は嫌われているんだよね……。悲しいね。でも、しょうがないね。
僕は少し暗い気持ちになりながら、草むしりをすべき場所へ向かった。

二人に遅れて指定された場所、校舎裏についたとき、先に向かっていた二人は既に草むしりを始めていた。

「佐藤！　お前おせえよ！　お前の仕事なんだからお前が一番働けや！」

「あ、ご、ゴメン……」

「まあまあ小嶋君。別に佐藤君は悪くないでしょ」

「ええー？　でも手伝ってやる俺たちが先に仕事を始めるってなんかおかしくね？」

「はいはい。いいから手を動かして」

「うぃーっす。おい、佐藤。お前もさっさと仕事しろよ。お前はあっちやってこい」

「う、うん。ごめんね」

「でさぁ、若菜ちゃん――」

小嶋君はもうすでに楠さんとの会話に集中していた。

あ、早く始めなきゃまた小嶋君に怒られちゃう。早く草むしりをしよう。

先生の話によれば各クラスから草むしり要因が出されていて、それぞれ草をむしる区域が違うみたい。僕たちの担当の校舎裏は結構広いから二人が手伝ってくれて助かったよ。

地面の上に用意されていたゴミ袋を持つ。道具はこれだけかなと思い、楠さんと小嶋君の方を見てみた。二人は軍手と熊手装備していた。どうやら道具は二人が使っているみたいだ。仕方がないから素手でやろう。

僕は小嶋君に言われた場所、二人の姿が見えなくなるところで草むしりを開始した。でもここ、指定された場所から少し離れている気がするなぁ……。でもいっか。綺麗になるんだから間違えていても問題ないよね。

……。

……。

……。

三十分くらい草をむしった。まあまあ綺麗になったと思う。あと少しだ。

「おい、佐藤」

「え？」

振り向いてみると、小嶋君が僕を見下ろしていた。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃねえだろ。お前さぁ、俺達は手伝ってやってんだからよ、気ぃ利かせて飲み物の一つでも買ってこいや」

「あ、ご、ごめんね」

本当だ。せっかく手伝ってもらっているのに何の差し入れも持って行かないなんてありえないね。

「なにか飲み物買ってくるよ。何がいいかな」

「なんでもいいからとっとと買って来いよ！」

「あ、う……。ご、ごめん」

怒らせちゃった……。

怒られたくない僕は慌てて自動販売機へ飲み物を買いに行った。

あ、でもこんな汚い手じゃあ飲み物持てないや。まずは手を洗おう。

自動販売機へ向かう途中にある手洗い場で泥を落とし、急いで自動販売機へ。ここから一番近い自動販売機は食堂かな？

校舎に入って食堂へ向かう。

食堂の入り口付近に備え付けられた自動販売機。ラインナップを眺めてみる。

「……うーん。何がいいんだろう……」

二人の好み分からないや。でも、こう言うときって何となくポリカスエットな気がするね。うん。そうしよう。

二百四十円入れてポリカを二本買う。それを持って急いで二人のところへ戻った。

「お、お待たせ……」

走ってたどり着いた校舎裏。

「……あれ？」

二人の姿は無かった。

きょろきょろとあたりを見渡してみる。

軍手と熊手が二セットずつあったけれど、それを使っていた人たちは見当たらない。何か用事でもできたのかな？

仕方がないので、とりあえず帰ってきたのがすぐわかるように、先ほどまで二人が担当していたところの草をむしりながら待つことにした。

十分後。

誰も来ない……。おかしいなぁ。帰っちゃったのかなぁ。

不安になり、飲み物を両手に持って立ち上がる。

でも、探しに行って入れ違いになっても嫌なので結局身動きができないままきょろきょろと見渡すだけしかできない。

ど、どうしよう……。

不安がピークを迎えようとすることろ、念願の土を踏みしめる音

が聞こえてきた。

「小嶋君？」

校舎の角から足音が聞こえてきたので音の方へと駆け寄った。
しかし、角から出てきたのは小嶋君でも楠さんでもなかった。

「あ、せ、先生」

「どうだ？　進んでるか？」

「あ、はい」

僕は小嶋君に言われて草をむしっていた場所に先生を案内した。
小嶋君と楠さんが草むしりをしていたところは僕の手柄じゃないからね。

「あと少しです」

「……」

先生は僕の成果を見て苦い顔をした。

「え、えっと……」

なんでだろう。

「おいおい。ここは指定した場所じゃないだろ。ここはしなくていいから道具が置いてあったところを掃除してくれよ」

「え、あ、はい……。そ、そうですよね」

「……はぁ。まったく。お前はまともに草むしりもできんのか。ほら、日が暮れる。早く終わらせろよ」

「はい……」

そう言って、先生は足早に去って行った。うう……。そりゃそうだよね。掃除してほしいところがまだ汚いんだからいいわけないよね……。

二人が担当していたところに座って草むしりを再開する。でも、このポリカどうしよう。ぬるくなっちゃうよ……。

辺りを見渡しながら素手でむしっていく。道具を使おうかとも思ったけれど、二人が帰ってきたときに僕が使っていたら嫌な気分になるかもしれないから素手で作業を進めた。

……。

……。

しばらくして、また足音が聞こえてきた。

こ、今度こそ。

僕はポリカを持って立ち上がった。そして、足音を迎える。

けれども、その足音はまたしても違う人の物だった。

「あれ。有野さん？」

綺麗に染め上げた金色の髪。薄汚い校舎裏では浮いて見えるけれど、どうしようもないくらい有野さんに似合っているのでそんな違和感帳消しだ。

大きな瞳で僕を睨み付ける。眼光が鋭いというのはこういうことを言うのだろうか。でもそう言う人って何となく目がつり上がっている気がするけど、有野さんの目は可愛く垂れ下がっている。ほにゃんとした目だ。

どうなんだろう。

有野さんのような可愛い眼の人でも眼光鋭いって使うのかな？使わないのかな。よく分からないや。

まあ、とにかく、眼光鋭いという言葉がぴったりの目で僕を睨み付けていた。……女の子に向かって眼光鋭いっていうのはいけないことなんじゃないかな……。で、でも、怖い……。

「ど、ど、どうしたの？　楠さんに何か用事？」

有野さんは僕の言葉には答えず一度辺りを見渡し大きな舌打ちをした。

「……佐藤一人かよ……」

「あ、ご、ごめん……。楠さんだよね？」

「……あいつらどこ行ったんだよ」

ずんずんと近づいてくる有野さん。

「え、うん。多分、何か用事があるんだと思うよ。きっとすぐに帰ってくるよ。あ、探してこようか？」

僕の言葉を聞いてまた大きく舌を打った。

「え、どうしたの……？」

怒っているようで怖いけれど、恐る恐る聞いてみる。

「あいつらは帰って来ねえよ」

「え？　どうして？」

「小嶋は部活、若菜はさっき校門から出て行くのを見た。あいつら仕事放りだして帰ったんだよ」

「え……」

じゃあ、この飲み物が渡せないよ……。どうしよう、渡しに行こうかな。

「あいつら……！　佐藤に仕事押しつけて帰りやがって……ふざけてんのか……？！」

憎々しげな表情で奥歯をぎりりと鳴らす有野さん。

「う。お、落ち着いて有野さん」

「……お前は、あいつらが勝手に帰ったことムカつかねえのかよ」

「え？　う、うん、別に……。もともと僕が一人でやる仕事だったし、少しでも手伝ってもらえたんだから感謝しなくちゃ」

少し表情を緩ませた有野さん。よかった。

「……ったく、お前は……。昔から変わんねえな……」

「え？　う、うん？　そうかな……」

「……。……ん？　その飲み物は」

「あ、えっと、その、喉が渇いたから、飲もうと思って……」

「二本もか？」

「うん。それくらい喉が渇いてたから……」

……二本、飲もう。

有野さんは僕の手に握られた二本の缶を見て一瞬悲しそうな顔を見せた。

「……そうかよ」

そう言ったのとほぼ同時に有野さんが僕の手からポリカスエットを奪い取った。

「あ」

と思ったときにはもうすでにプルタブを開けごくごくと飲まれていた。

「あー、うまい。ちょうど喉が渇いてたんだ」

よかった。これで無駄にならずに済んだね。

「あん？　なんか文句あんのか？」

「あ、う、ううん。全然ないよ」
「そうかよ」
そう言って、また飲みだした。
「……ふぅ。佐藤も喉が渇いてるなら飲めばいいじゃねえか」
「え？　あ、うん」
……二人とも帰っちゃったのなら、飲んでもいいよね。
僕もポリカを飲むことにした。
うん。おいしいや。アクリエアスよりも甘いよね。
「って、何だこれ！　缶が泥だらけじゃねえか！」
汗の掻いた缶は僕の手についていた泥で茶色く汚れていた。その泥が有野さんの可愛い手を汚してしまっていた。
「あっ、あ！　ご、ごめん！　そう言えばさっきまで草むしりしてたんだった！　ごめんね！」
「お前なんで軍手使わねえんだよ！　そこに用意されてるじゃねえか！」
「え、あ、うん。その、うっかりしてて……！」
「うっかりって、お前よく見たら爪の間土だらけじゃねえかよ。んな状態ならすぐ気付く……、……ちっ。そうか」

軍手を睨み付けてまた舌打ちをする有野さん。そして小声で何かをしゃべっていた。

「……初めから私が手伝っとけばよかったぜ……」

「え？　ご、ごめん、聞き取れなかったんだけど……」

「あん？　何も言ってねえよ。そんなことより、ポリカの礼だ。私も手伝ってやる」

「え、そんな、お礼なんていいよ別に」

「うっせえな。それじゃあ私の気が治まらないんだよ。いいからさっさとするぞ。今からちゃんと軍手つけてやれよ。道具もちゃんと使えよ」

「あ、うん。……ごめんね」

「悪くねえんだから謝るなって」

僕の顔に泥がついていたのか、何かを拭うようなしぐさで僕の顔を撫でてくれた。

「んじゃ、さっさと終わらせようぜ」

そう言って、かっこいい笑顔を僕なんかに向けてくれた。

「ありがとう」

――やっぱり、優しいな。

有野さんに手伝ってもらった草むしりはすぐに終わった。有野さんの豪快なむしり芸は惚れ惚れするような技だった。見習いたいね。

「ふー……」

軍手を地面に放り投げて立ち上がり腰をトントンとたたく有野さん。

「ありがとう。おかげで早く終わったよ」

「別に。飲み物の礼だし」

「あ、もう一本買ってくるよ」

あれだけじゃあ足りないはず。早く買ってこなきゃ。

立ち上がって駆け出そうとした。けれど、有野さんが引き止めてきた。

「いらねえよ」

「え、そう？　喉かわいてない？」

「全然かわいてねえよ」

と言いながら汗をぬぐった。やっぱり、何か飲んだ方がいいと思うんだけどなぁ……。
行こうかどうか迷っていると、有野さんが空を見上げ僕に話しかけてきた。
「佐藤とこれだけ話したのも久しぶりだな」
「うん」
何となく僕も向こうの空に目を向けた。
夏の手前の入道雲。
もうすぐ、あの頃のように暑くなる。
「……。あの、さ」
「うん？」
僕は有野さんに視線を戻した。有野さんはまだ空を見上げたままだった
「……。……あー、なんでもねえわ。んで、草むしり終わったけど、どうする」
急に怖い顔を作って僕を睨み付ける有野さん。
「ど、どうするって、何のこと？」
怒られるのかな？

「あいつら二人。しめるなら手伝うけど」

とんでもないことを言いだした！

「そ、そんなことしないよ。誰も悪くないんだから」

「納得できんのか？　あいつらお前を馬鹿にしてんだぞ？」

「そんな。違うよ。二人とも草むしりより大切な用事があったんだよきっと。なら、しょうがないよね」

「それでも一言声かけて行くのが礼儀ってもんだろうが」

「う、うん……。でも、僕がちょっと姿を消していたから、言えなかったんだよ。だから、その、しょうがないのかなぁ、とか……思ったり」

ど、どうしよう。ここで有野さんを納得させなければ明日二人の命が危ない……。僕の手にかかってるんだ……！

なんて気負っていたが、

「あーそんな顔すんなって。分かったから。誰も悪くねえな。うん」

すぐに有野さんが笑いかけてくれた。

「あ、ありがとう」

ふぅ、よかった。

「礼言われるようなことしてねえよ」

楽しそうに笑った。
僕も笑った。
何となく、昔を思い出した。
でもそれも先生の登場ですぐに終了する。

「終わったか」

「あ、はい。終わりました」

「ん？　有野手伝ってやったのか」

「そうだよ」

「珍しいこともあるんだな」

それはちょっと失礼だと思う。けど、僕にはそれを咎める度胸がなかった。
情けない。
有野さんは優しいのに、手伝ってくれたのに。失礼なことを言う先生に、僕はそれを訂正させることができない。
情けない。
先生が辺りを見渡す。

「へぇ、綺麗になったな。よし、ごくろうさん。あとはこのゴミを焼却炉に持って行ってくれ。そうしたら帰っていいからな」

「はい」

先生が来た道を引き返して行った。

よかった。やっと帰れるよ。何事もなく終わったなぁ……。と、思ったのだけれども、有野さんとしては何事もなく終わらせたくないみたいだ。

「おい、お前ちょっと待てよ」

う？！　先生相手にお前って！

もしかして、手伝うのが珍しいって言われたのが気に障ったのかな……。

「……お前って言うのは、俺の事か？　先生相手にお前なんて言ったのか？」

「それ以外に何があんだよ」

とても怒った顔で振り返る先生。

「……有野。もう一度聞く。お前、俺に向かってお前って言ったのか？」

「耳わりぃのか？」

う、うわあああああ！　危ないよ！　何か空気が危ないよ！

「あ、有野さん……」

有野さんの制服を軽く引っ張った。

「なんだよ」

怒り一色の顔で僕を振り返る有野さん。う、怖い……。

「そ、その、気に入らないことが会ったのかもしれないけれど、穏便に、穏便に、いこ？」

僕の情けない言葉に困った顔を見せる有野さん。

「……お前、それでいいのかよ」

「え、え？　な、どういうこと……？」

「……あーいや、いいわ」

本当に分からない……。僕のせいで怒ったのかな……。

「そんな悲しそうな顔すんなよ。別にお前には怒ってねえんだからさ」

「え、あ、うん」

先ほどの表情からは考えられない素敵な笑顔。そんな笑顔見せられたらドキッとしちゃうよ。

……でも先生はご立腹していらっしゃる。恐ろしい表情で僕らを睨み付けていた。

「おい、有野。お前、教師に向かってその口のきき方はなんだ」

な、何とかしなきゃ怖いよ！

「ち、違います先生！　今、有野さんは僕に向かって言ったんです

！」

「お前には聞いてない。有野に聞いてるんだ」

「う、ごめんなさい……」

そうですよね……。

「有野、お前、教師に対しての言葉遣いじゃないよな」

「はぁ？　佐藤の事呼んだんだけど」

「……。……それでも、お前の口調は教師に対する言葉遣いじゃないだろう？」

「あーはいはい。すみませんでした。どうぞお帰りください」

先生の、とても疑いのこもった視線。

「……まあいい。早く帰れよ」

「は、はい……」

よかった……。何事もなく済んだね……。

先生の背中を見送り、完全に視界から消えたところで有野さんが僕に困ったような顔を見せて言った。ううん、言ってくれた。

「お前さ、ガツンと言わないからあいつに舐められるんだぜ？　ブッ飛ばすつもりで何か言ってやれよ。そうしなきゃまた嫌なこと押し付けられるぞ」

「え、そ、その……」

「見ただろ？　あいつの舐めきった態度。『ごくろうさま』だけだぜ。舐めんなって話だろ。佐藤はあいつの奴隷じゃねえんだ。もっと佐藤に感謝しろよな……！」

徐々に顔が修羅の者になっていった。怖いよ……。

……女の子の怒った顔を見て怖いなんて思う僕はとても失礼な人間ではないだろうか……。

「あいつ、絶対に佐藤の事見下してるぜ。ふざけてるよな」

「で、でも……」

「お前、今度からはあいつの頼みごと断れよ。別に佐藤じゃなきゃいけねえ理由はないんだ。メリットだってないんだし、言うこと聞く必要ねえだろ」

「でも」

「でもでもうるせえな。なんだ？　あいつの言うこと聞いていいことあるのか？　ねえだろ？」

「う、ううん。誰もできないから僕が指名されているわけだし、僕がやらなかったら違う人が困るし……。その、だから、僕でいいというか……」

「誰かが困る位なら自分が困るって？」

「まぁ、うん、そんな感じ、かな？」

大きな大きなため息をつく有野さん。

「お前は……。本当にどうしようもねえな」

「う、ごめん」

「褒めてんだよ」

え、分からなかった。

有野さんがにっこりと笑った。

「まあお前がいいならそれでいいや。でも困ったら私に言えよ。助けてやる」

「あ、うん。ありがとう」

「きにすんな。んじゃ、さっさとそれ焼却炉にぶち込んで帰ろうぜ」

「あ、う、うん。ありがとう。本当にありがとう」

「そんな大げさなお礼いらねえよ」

気持ちのいい笑いを見せてくれた。

今日の仕事は、いつもと違ってとっても楽しかった。

虫よけスプレーの信頼度

「佐藤君」

僕は、草むしりを終えたあと、教室へカバンを取りに行き、「今何時かな？」と携帯を開き、ついでに未読メールを見たと思ったら、いつの間にか秘密基地の前で正座をしていた。ここまでの道のりを覚えていない……。

まだ日が沈むには時間があるけれど森の中は薄暗い。涼しい位だよ。

でもそれどころじゃありません……。

「舐められたものだね。まさかこんな仕打ちを受けるなんて……」

「そ、その……」

メールの差出人は楠さんだった。『今すぐ君の秘密基地へ来ること。遅刻厳禁』という内容のメールが一時間ほど前に僕の携帯に入っていた。草むしり中携帯は教室のカバンの中だったので当然気付かなかった。僕は慌てて秘密基地へ向かい、今に至る。

「しかも、これだけ待たせるなんて。一時間私はここで待ちました。一時間蚊に刺されるためにこの林の中で突っ立っていました。これはあれだね。君の愚行をばらすしかないね」

「え？！　ご、ごめんなさい！　そ、それだけは許してください！」

僕は潔く土下座をした。だって、楠さんが蚊に刺されたなんて重大事件じゃないか！　時代が時代なら僕は打ち首だよ！

「みっともないね」

楠さんの声と同時にカメラのシャッター音が聞こえた。でも、これは仕方がないよ……。

「顔を上げて。早く」

「はい……」

顔を上げ、楠さんを見上げてみる。依然として、無表情で怒っている。

「で？　言い訳は？」

遅れた言い訳かな……。

「あの、僕、」

「くだらない言い訳だったら問答無用でばらすから。君がそう言うふざけた態度を取るのなら、話し合いも何もしない。謝っても許さない。君のしたことをみんなにばらして、学校にいられなくしてやるから」

うう……。僕のしたことって、僕何もしてないよ……。

「さあ、納得のできる遅刻の言い訳を是非。よく考えてね。これで君の人生が終わるかもしれないんだから。面白かったら許さないことも無いよ」

「お、面白い、言い訳……」
「まあでも君面白くない人間みたいだし、ギャグに逃げるのはやめておいた方がいいと思うよ。ちゃんと私が納得できる言い訳をするんだね」
「う、うん」
でも、言い訳って……。
「その、草むしりに手間取って……」
「はぁあああ？」
どうやらこの言い訳は楠さん的に気に入らないみたいだ！
大変だ大変だ！　楠さんの顔が大変だ！　どう大変って……表現したくないくらい歪んでいるよ！
その、色々な意味で怖い顔をグイッと近づけ言う。
「君、先に帰ったでしょ？」
……。
「え？」
「君、私たちに仕事押しつけて先に帰ったでしょう？」
「え、え、え？」
「えーえーうるさいね。それ以外に言う言葉がないの？　よし、ば

らそう」

僕から顔を離し携帯電話を操作しだした楠さん。

「あ、ちょ、ちょっと待って！」

僕は正座をしたまま両手を突き出して待ったをかけた。

「なに？　遺言？　まあ聞いてあげないことも無いよ。友達に電話がつながるまでの数コールだけ時間をあげる」

短っ！

「その、僕飲み物を買いに行ってたの！　多分それで校舎裏にいなかったんだと思う！」

「……あ、丸山さん？　その、ね……少し、話があるんだ……」

電話が繋がっていらっしゃる！　死んじゃうよ！

「ごめんなさいごめんなさい！」

両手をバタバタ振って何とか通話を辞めてもらおうとした、けど……、

「え？　ううん？　違う違う。ただの鶏じゃないのかな？　うん、チキン野郎」

楠さんが左手で僕の頬を挟み込みうるさいと睨み付けてくる。でも僕にとってもそれどころじゃないよ！　腰を浮かせたままパタパ

タと手を振って必死に校舎裏にいなかった理由を言う。

「ほ、本当に許してください！　小嶋君に言われるまで気付かなかった、気を利かせて早く飲み物を買いに行かなかった僕が悪いんですけど、タイミングが悪かっただけなんですー！　もう少し早く気づければこんなことにならなかったんだよね！　ごめんねごめんね！　今度からはまずお礼を買ってから仕事を始めます！　だから許してください！」

一瞬沈黙した後、楠さんが手を離し僕を地面に落とす。そして僕をいぶかしげな表情で見つめてきた。

「……。え？　あ、ごめんね。話っていうのはおすすめの喫茶店とかないかなってね。ほら、丸山さんの行くお店ってとってもセンスがいいでしょ？　だから、どこかいいところ教えてもらおうかなーって思って！　うん、うん。あ、あそこかー！　うん、分かった。うん、うん。ありがとう！　じゃあ、また明日！」

よ、よかった。助かったみたいだ……。

通話を切り、楠さんがしゃがんで僕と視線を合わす。

「……小嶋君と話したの？」

「う、うん。その、小嶋君にマナーのことを指摘されて、なるほどと思って慌てて飲み物を買いに行ったんだけど、その、タイミングが悪かったみたいで、その、帰ったと思わせちゃったね……」

「……私は小嶋君から君が帰ったって聞いたんだけど。小嶋君が様子を見に行ったときにはもう帰った後だったって」

「え、え？　僕、帰ってないよ？　今まで草むしりしてたよ？」

「……。……ちょっとタンマ」

そう言って立ち上がり僕から少し離れた。いったい何事だろう？
ぼけっと眺めていると、楠さんがカバンの中に手を突っ込みタオルを取り出し始めた。
汗でも拭くのかな？　と思ったけれど違うようだ。グローブのように手にタオルを巻き、一本の木に近づいて行った。
？
……！？　え、え？　え？　な、何してるの？！
僕は驚きで全身の力が抜けてしまっていた！

「……！　……！　……！」

何かをつぶやきながら、思いっきり木を殴りつけだした！　手が痛いよ！　僕の手は痛くないけど！　楠さんの手が痛いよ！　せっかくの綺麗な手に傷がついちゃうよ！
つぶやきが、少しだけ聞こえてくる。

「あいつ……！　嘘ついて……！　これじゃあ、私が、さぼった、みたいじゃない！」

う、うう……。一体何のことだかわからないけれど、とても怒っているみたいだよ……。あの木には、もしかしたら僕が重なって見えているのかもしれない……。うう、ごめんね……。何に怒っているのか分からないけれど……。

「……。ふぅ……」

拳を木にめり込ませたまま、大きく息を吐いた。すぐに全身から力を抜き、腕をだらんとたらす。もう一度息をはいたあと手からタオルを取って綺麗に畳み、カバンにしまった。そして、無表情の顔を僕に向けてくる。
本当に失礼だと思うけれど、僕はびくっと畏縮してしまった。
ずんずん近づいてきて、へたり込んでいる僕に頭を下げた。

「……今回は、完璧に私が悪い。ごめんね佐藤君。疑っちゃった」

「え、え？」

何のことを謝っているのだろう……。

「ズボンが汚れるから正座やめて」

「あ、うん」

立ち上がりズボンを払う僕。

「ごめんね一人置いて帰っちゃって」

「う、うん……」

謝るようなことなのかな……？

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……？」

な、何だろう。なんで僕はじっと見つめられているんだろう。何か僕の言葉を待っているような……。ぼ、僕は何を言えばいいだろう……。

「そ、その……」

分からないけど、とりあえず。

「ご、ごめんね……？」

謝っておこう。

「……なんで謝るの。私が悪いって言ってるのに」

「う、い、いや……その、何言えばいいのか分からなくって……」

「叱責すればいいでしょう。気のすむまで言葉責めすればいいよ。好きなだけ責めて興奮すればいいよ気持ち悪い。どんな言葉で罵るんだろうね。楽しみだよ。それも録音するけど」

「そ、そんなことしないよ！　なんで僕がそんなことするの？！」

「私が佐藤君を呼び出して土下座までさせてでもそれは私の勘違い

だったんだから君が怒っても仕方がないでしょう」

「よく、分からないけど……。でも勘違いは誰にでもあるし、そんなのを怒っていたら過ごしにくい世の中になっちゃうよ」

勘違いは怒っちゃだめだと思うよ。

「……。何なの君？　それで私に恩を売っているつもり？　気分悪いよ」

「そ、そんなつもりじゃあ……」

うわ、怒らせてしまった……。

「ずっと気になっていたんだけどさ、佐藤君、悪くないのにとりあえず謝るよね。結構不快だよそれ。自分が謝っておけば済むだろうって思ってるの？　私が悪いのになんで謝られなきゃいけないの？　おかしくない？」

「お、おかしいです……」

「だから謝って」

「え！」

なんだかおかしくないかな？！

「とりあえず謝ってよ」

「ご、ごめんなさい……？」

少し理不尽さを感じながらも一応謝ってみた。

「……まあいいや。今日はごめんね。言い訳のしようがないよ」

「う、ううん。その、こちらこそ、手伝ってくれてありがとう」

「……嫌味？」

「う、ううん！　そんなつもりはないよ！」

「……。じゃあ今日のことは本当に申し訳なかったということで、お詫びに佐藤君が部屋で服を脱いで私を襲おうとしている写真を消しておいてあげる」

「あ、ありがとう！」

「どういたしまして。別にお礼を言われるようなことではないけど」

まあ、確かに僕はそんなことしていないのだからね。

「じゃあ、私は帰るね。ごゆっくり」

「あ、ばいばい」

楠さんが山を下りて行った。

放課後ごたごたしたけど、よかったー。色々と解決したみたいだね。これで何のわだかまりもなく明日を過ごせるね！

僕は意気揚々と家に帰った。

何事もなく過ごせるね！　なんて思っていた昨日の僕。それは間違いみたいだよ。

僕が朝学校にたどり着いたときそこはすでに修羅場だった。

「…………」

「…………」

有野さんが楠さんを睨み付け、楠さんがシュンとうなだれていた。教室内はその風景に飲まれて誰も言葉を発せなくなっていた。

な、何事ですか……？　この不穏な空気を作り出していらっしゃるお二人を見るにどうも昨日のことが関係しているような気がしないでもないよ……。

「若菜お前なんで昨日佐藤を置いて帰ったんだよ」

「ごめんなさい……」

「理由を聞いてんだよ。謝るのはそれからにしろよ」

う、うわあああ！　有野さんが楠さんを怒ってるよおおおおおおおおおおおおおおお！　有野さんに説明しておけばよかったあああああああああああああああああああああああああああああああ！

「大切な用事があったのかなんか知らねえけど、なら初めから手伝

うとかいうなよ！」

「うう……ごめんなさい……」

あの楠さんをこんなにも落ち込ませることができるのは多分有野さんだけだと思う。って、そんなことより！

「あ、あ、有野さん……」

僕は二人に駆け寄った。というか有野さんに駆け寄った。

有野さんが僕に気づき、申し訳なさそうな顔で言った。

「……佐藤。お前は別に怒ってねえみたいだったけど、やっぱり私は納得できねえみたいだわ」

「……」

楠さんが本当に悲しそうな顔で有野さんを見上げた。

「本当にごめんなさい……。全面的に私が悪いです……」

それを睨みで返す有野さん。

「私に謝るんじゃなくて佐藤に謝れよ」

あ……。僕の為に怒ってくれているんだ……。優しい人だなぁ。

……で、でも……、僕、すでに謝罪してもらっているからね……。説明しなきゃ。

「あ、有野さん、その、僕昨日謝ってもらったんだ」

「……。……はぁああ？」

僕の発言が何やら有野さんの気に障ったようです。

「お前、なんで校外で若菜と会ってるんだよ」

「あ、その、用事があるからって呼び出されて……」

「ちげえよ。どうやって呼び出されたのかって聞いてんだよ」

「え、え？　その、携帯電話で……」

「……」

な、ななんでそんな顔で睨んでくるんですか？！

「……若菜のアドレス知ってんだ……」

「え？　うん」

……。

……。

……え？！

「あ！　僕楠さんのアドレス知ってる！　すごい！」

いつの間に！　あ、そう言えばメール送られてきてたっけ！　なんだかうれしいね！　今まで気付かなかったよ！　うわー。なんか感激だなぁ。クラスの女の子のアドレス教えてもらったの初めてだ

よ。しかもそれがあの楠さんのだからね。すごいことだよこれは。

「……んだよ……」

有野さんが不機嫌そうに教室を出て行った。

「え？　あれ？」

怒らせちゃったのかな……。僕が悪いことしちゃったんだ。でも、楠さんとの言い合いが止まったね。僕が泥をかぶって解決したのなら、まだいいよね。

と思っていた時期が僕にもありました。

「ごめんね……佐藤君……うぅ……ごめんね……！」

「え！」

今度は楠さんが目を拭いながら教室を出て行った！　これはよくないね！

有野さん、楠さんが出て行った後の教室。僕は一度教室を見渡してみた。とてもクラスメイトを見るための物ではない視線を僕に送っていた。

「……ま、まってー」

僕はとりあえず教室から逃げることにした。……だって、さぁ……。

有野さんも楠さんもどこに行ったか分からないけれど、何となく、僕は屋上へ行ってみた。

運よく、楠さんが腕を組んで立っていてくれた。

「く、楠さん……、ご、ごめんね」

「別に悪くない。責められて当然の事したんだから。有野さんから聞いたけど有野さんに手伝ってもらったんでしょ。なら有野さんに責められても仕方がない」

う……。なんだか僕は何も言えない……。楠さんの言葉を肯定すれば楠さんを責めてしまうし、否定すれば責めた有野さんを悪く言っているようにとられちゃうかもしれない……。どうすればいいんだろう？

「またそんな顔をして。素直に私を責めればいいのにごちゃごちゃ考えて。あぁ、本当に面倒くさい」

「ご、ごめんなさ――」

「ああ、そうそう」

「――え？」

僕の言葉を遮る楠さん。

「クラスの男子で、と言うか家族以外の男で私のアドレス知ってるの君だけだからあんな大きな声で言わない方がいいよ。っていうか言わないでよ」

「え、そ、そうだったの？　ごめん……」

「そうだったのって、私がアドレスばらまいてるとでも思ってたの

？　すごく失礼。ちょっと転校して」

「う、うん、わかった……って、転校なんてできるわけないよ！」

危なくノリで転校させられるところだった！

「……女々しい人……」

「そ、そう言う問題かな……」

「そう言う問題なの。だから、転校が嫌だったら私のアドレス知っているって言いふらさないでよ」

「わ、わかった。転校は嫌だもんね……」

「ま、もう手遅れかもしれないけど」

「手遅れ？」

「あれだけ大勢にばれちゃったらね。まあ、どうでもいいけど……」

どうでもよくなさそうだった……。

「ところで、佐藤君」

「はい」

「君、あの有野さんに気に入られているみたいだけど、何かしたの？」

「え？　僕が有野さんに気に入られてる？」

「……そう言ったんだけど、なんで聞き返すの？」

「う、ご、ごめんなさい……。で、でも、それは違うよ」

「違うって、どの角度から見てもそうとしか思えないんだけど。もしかして君は鈍い人種なの？　まあ、見た目は完全に鈍いというか要領の悪そうな見た目をしているけど」

要領の悪そうな見た目って、初めて言われた……。でも実際そうだからそう言う見た目をしているんだろう。悲しいけど……。

「落ち込もうがどうしようが君の勝手だけど、その前に有野さんとの関係を説明してよ」

「あ、う、うん。あのね、僕と有野さんは、小さいころからずっと同じ学校に通っているんだ」

「……なんでそんな面倒くさい言い回しするの？　それ幼馴染ってことでしょ？　幼馴染って言えばいいじゃない」

「……」

僕と有野さんは幼馴染だ。正確には、僕と有野さんと有野さんのお兄さんは幼馴染だ。

でも、今の僕には幼馴染だって胸を張って言えない。

……僕は、有野さんを怒らせているのだから。

「なんだ。幼馴染って言わなかったのは何か理由があったからなん

だ。幼馴染って言えないんだ」

「う、うん……。その、僕、小学校の頃有野さんを怒らせちゃって、それからずっと疎遠だったんだ……。だから、幼馴染って言ってもいいのかなって」

「ふーん。なんで怒らせたの？」

「その……それが分からなくて……」

分からないけれど、私を下の名前を呼ぶなって怒られた。もちろん謝った。でも許してくれなかった。当然だよ。理由も知らずに謝って、許してくれるはずがないよ。

今も僕は分かっていない。だから、有野さんも許してくれていないんだ。

今日も怒らせてしまったみたいだし、いい機会だ。あの時のことも謝ろう。許してもらえないかもしれないけれど、もう一度謝ろう。

「……教えてくれなきゃ、ばらすよ？」

う！　楠さんは僕が理由を隠そうとしていると思っているんだ！違うよ？！

「ほ、本当に分からないんだ……」

「……本当かな……」

とても怪しんだ視線。でも僕にはどうしようもない……。本当の本当に分からないから。

「……まあ、いいや」

納得してくれた。よかった。

楠さんが僕に「先に教室に帰って」と言ってきたので、僕は一人先に教室へ帰ることになった。教室に入ると、すぐにみんなから冷たい視線をもらったので、僕はうつむき顔を隠しながら自分の席へ向かった。教室の端っこにある自分の席がこんなにも遠いとは思わなかった。一番角っこでいい席だなと喜んでいたけれど、まさかそれをうっとおしく思う日が来るとは思いもしなかった。席へつき、急いで本を取り出す。僕は無事に幻想世界への逃避することができた。でも、没頭する前に、一度教室内の様子を見る。相変わらずみんな冷たい視線を僕にくれていた。……有野さんの姿は見えなかった。

それからしばらくして、楠さんが教室に帰ってきた。みんなに囲まれ、事情を聞かれたり慰められたりしていたけれど、楠さんは気丈な笑顔で「大丈夫」と答えるだけで深く説明することはしなかった。でもそれが余計に僕への視線を強めていたけれど、誰も責められないよ……。

一方有野さんは、朝のホームルームが始まっても教室に入ってこなかった……。

僕のせいだ。

きょうはくっ！

楠若菜さん。

黒髪ロングにスタイル抜群のモデル体型。パッチリお目目にまぶしく瑞々しいお肌。

世界中のだれが見ても褒める事しかできないほど完成された容姿。

美人で、勉強ができて、運動もできる。人望もあるしそれに応える力も持っている。いわゆる完璧な美少女。悪くとらえられたら困るけれど、八方美人と言う言葉がよく似合う。楠さんのことを軽んじているわけではないし、僕は当然尊敬もしているけれども、裏にある感情を知ってしまった僕はついついそう言う目で見てしまう……。

みんなに分け隔てなく優しさを振りまき、差別なく人と接する楠さん。

多分、誰も楠さんの真の姿を知らない。もしかしたら、僕に見せているのも真の姿ではないのかもしれない。

言うなれば、完璧な八方美人。

八方美人を演じきれる素質を持った人。

八方美人でありながら、誰にもそれを悟られない。

それは、とてもすごいことだと思う。ぼろを出さない、と言うのは少しはばかられる気もするけども、欠点の一つも見せないのはそれなりの才能がなければできないことだろう。

誰にもばれていない楠さんの裏の顔。

当然だけれども、裏の顔が誰にもばれていないのであれば、見えている表の顔、完璧な姿が、みんなにとっての楠さんなのだ。

完璧すぎる人。

皆の共通の認識。

でも。

それでも、全ての人間に好かれるということは難しいらしい。

楠さんのことが気に入らない人が何人かいるみたいで、衝突している姿を度々見る。
多分それは嫉妬で、楠さん本人に非があるわけではない。
欠点がない事が欠点、とでも言えばいいのかな……。
嫉妬することでやっと悪く言える。
でも結局それも、嫉妬する側が自分で自分の徳を下げる行為でしかなく、楠さんは何ら困らない。誰も楠さんを貶めることはできない。
唯一有野さんだけが楠さんに文句を言ったりしているが、その内容も嫉妬以外の何物でもないように思う。
有野さんと楠さんの仲がよくないのは、個人的にとっても悲しい……。

「あの、楠さん」

「なに？」

楠さんと一緒に屋上で食べるお弁当。
何故だかわからないけれど、今日も一緒にお弁当を食べることになっていた。

「有野さんの事、どう思ってるの？」

「なんでそんなこと聞くの？」

「え。あ、いや、その……。……仲良くしたらいいのになって思うから……」

「ふーん。そんなこと心配するなんて、一応幼馴染なんだね」

「お、幼馴染とか、そう言うんじゃなくて、その、みんな仲良くできたらいいのになって思って……」

「残念でした。仲良くするとかしないとかは、人に言われて出来るようなものじゃありません」

「あ、そう、だよね」

「君がいくら心配しようが私と有野さんの関係がどうにかなるわけじゃないから余計なこと考えない方がいいと思うよ」

「う、うん」

そうだよね……。僕みたいなちっぽけな人間が他の人の関係に介入できるわけないよ。僕はどうしようとしていたんだろう……。自分でもよく分からないや。

「でも」

と、楠さん。

「別に私は有野さんのことを嫌ってないし、嫌な人だとか、うるさい人間だとか、そんなマイナスなイメージは持っていないんだよね」

「え？」

そうだったんだ。

「でも、有野さん、よく楠さんに言いがかりみたいなこと言ってる、よね？」

「君は幼馴染なのに何にも分かってないんだね」

「え？」

「君の知っている有野さんはそう言うことを言うような人間だったんだ？」

「えっと、うーん……。好き嫌いははっきり言うけど、人の才能に嫉妬したり、人がちやほやされるのを見て嫌な気持ちになったりするような人ではなかったと思うけど、でも実際に楠さんにそう言うことを言っているから、その、変わったんだなぁって思ってた」

「ま、しばらく関係が断たれていたみたいだし、そう思っても仕方がないかもね。でも可哀想。まさか佐藤君にそう思われているなんてね。あぁ、表面でしか人を見れない佐藤君最低。人の心の奥底なんて見ようとしないんだろうね」

「う……。ご、ごめんなさい……。……え？　えっと、つまり、それは、有野さんは何か理由があって楠さんに突っかかっているの？」

「自分で有野さんに聞けば？」

「あ、そうだよね。ごめんね」

「あーはいはい。どうでもいいよ」

う……。どうやら僕が謝る度に不快になるみたいだ……。謝れないのかな、僕。

「お昼時にこんな面白くない話したくない」

「あ、うん。そうだね」

「何か面白い話してよ」

「む、無茶ぶりだね……」

「無いのならいいよ。佐藤君の犯した罪をみんなにばらして楽しむとするから」

「え！　ま、待って！　面白い話するから！」

「自分で面白い話をするって言ってから話しだすなんて、Mだね。ハードル上がりまくり」

最初にハードルを上げたのは楠さんだけどね……。

「えーっと、うーんと……」

面白くない人間の僕には難しいよ……。

面白い話、おもしろい話……。……。

「……あ！　そうだ！　そう言えば――」

「ちょっと聞いてもいいかな」

僕が勇気を振り絞って面白いと思う話を始めようと思っていたけれど、その前に楠さんは何か聞きたいことがあるみたい。

「――え？　うん」

なんだろう。

「例えばさ、本で『マイナスイオンは科学的根拠のない疑似科学だ』っていう知識を得たとします。それを次の日人に話すとき、『昨日本で読んだんだけど』って前置きするでしょ」

「うん」

「じゃあ、二年後話すときもそう言うのかな。『二年前に本で読んだんだけど』って前置きする？」

「う、うーん。多分、前置きしないと思う」

「そうだよね。きっとその知識をどこで得たのか忘れているよね。どこで得た知識かは知らないけれど、それを知っているから人に話す」

「うん」

「それで、ちょっと気になるんだけど、それはいつから自分の知識になったのかな。どれくらい時間が経てば『本で読んだ知識』じゃなくて『自分の知識』になるのかな」

「え、う、うーん……」

いつからだろう……。

「その、本で読んだっていうことを忘れるまで、とか？」

「情報元を忘れたら自分の知識になるの？　それおかしいでしょ。情報じゃなくて情報元に左右されるっていうのはどうなのかな」

「えっと……。あ、じゃあ、その情報が本当だって、自分の中で確証が得られたらじゃないかな。そうしたら自信を持って自分の知識と言えるね」

「どうやって確証を得るの。マイナスイオンが科学的に証明されていないなんてどうやって自分で調べるの」

「え、えっと、どこかで教えてもらうとか、本とか読んで自分で深く調べるとか……」

「教えてもらたのが本当かどうかはどうやって調べるの。読んだ本が本当かどうかなんてどうやって調べるの」

「う……」

そうだよね……。

「でも、そう掘り下げて行ったら何も信じられなくなっちゃうよ……」

「そうだね。テレビ、新聞、インターネット、本。もっと言えば、教科書、身近な人の体験談。何も信じられなくなっちゃうね」

「そうだね……」

「自分で体験したこと以外は真の知識とは言えないと」

「そう、なるのかな？」

「そうなるでしょ。自分体験したこと、自分で実際に実験して調べたこと以外は知識とは言えないと。究極を言えば今まで実証されてきた科学や、証明された数々の数学の公式なんかも、それが本当かどうかを自分で調べなければ真かどうかは分からないってことなんだよ」

「う、うん」

「つまり、君の言う知識と言うものは、前提自体を証明することから始めなきゃいけないんだね」

「そ、そう、なるの、かな？」

そんなに大それたことを言ったつもりはないけれど……。でも、そういうことなのかな。

「私たちが教えてこられた歴史、情報、常識は嘘である可能性がある。これは洗脳されている可能性があるね……」

「う、うん」

そう考えたら怖いよ……。

「昨日楠さんが言ってた電車内でのマナーもそれに通じるものがあるね」

「そうだね。みんながダメダメ言ってるから何となくダメなんだっ

て思ってたけど、本当のところはどうなのか分からない。洗脳だよ洗脳」

「うん。怖いね」

「だから、これからは電車内で通話してもいいってことなんだよ」

「うん」

「いや、そんなわけないでしょ」

「……え？！」

まさかの裏切りだった！

「郷に入っては郷に従え。訳が分からなくてもルールなんだから従おうよそこは」

「う、うん。ごめんなさい……」

「しょうがないから許してあげる」

「ありがとう」

……なんか、少し釈然としないや。騙されている気がするよ？

僕は謝る必要があったのかな？

「ところで」

「うん？」

「君は想像ついていると思うけど、私の兄は君と同じようにアニメとか漫画が好きでさ」

オタクと言わなかったところに何かしらの含みを感じるけれども触れないようにしよう。

「私、部屋に入ってその兄のコレクションを眺めたりするんだけどさ、なんでああいうのって四文字の題名が多いの？」

「う、うーん……。なんか、可愛いからかな……。言いやすいし……」

「でもさ、多すぎて混乱しちゃわない？」

「う、うん……。する……、かな？」

あまりしないけれど……。

「私は四文字にしない方がいいと思うんだよね」

「え？　どうして？　可愛いからいいと思うけど。覚えやすいしメリットが多そうだと思うけど」

「四文字が氾濫している中で、自分の四文字だけ拾ってもらえると思う？」

「う、うーん？」

「そりゃ流行ればいいと思うけどさ、流行らなかったら悲惨じゃな

い？　安易に四文字の波に乗った安っぽさが出ちゃいそう」

「あー……」

確かに、それはあるかも。無理やり省略して四文字にしているものや、よく分からない四文字の物もよく見る。『そ○○○っ』とか、『る○る○』とか。そう言うのは、ちょっと安っぽさを感じちゃうね。

でも興味が湧くのも事実。ついつい買っちゃうもん。……でも手を出して失敗したことも多々……。うう……。絵は綺麗なのに……。内容スカスカ……。『すかすかっ！』だね。

「四文字がいいっていうけどさ、それは読む人が勝手に呼びやすい略称を考えてくれるんじゃないの？　リモコンエアコンパソコン。コンばっかりになっちゃった」

「そうだね……。大体、どの漫画にも略称ってあるよね。そう言えば、すごい略し方のゲームとか本があるよ。題名のひらがな部分だけを取って略称とするゲームとか、小説とか。そう言うのってよく考えたなぁって感心しちゃう」

みんな頭がいいんだね。すごいや。

「でもまあ、四文字は四文字で無難なのかもね。もはやそのレベルまで蔓延しちゃってると思うよ」

「うん、そうだね。たくさんあるね」

「四文字ならどんなものでも題名っぽく聞こえるんじゃない？」

「そうなのかな？」

「『ごきぶりっ』とか」

「それは……全然題名にふさわしくないよ……」

「『けらちん！』とか」

「えっと、タンパク質……だよね……？　髪の毛とか、爪とかの……」

全然面白くなさそうだよ……。

「何、さっきから否定的だね。私のセンスがないっていうの？」

「そ、そうは言ってないけど……」

「なら私の本気を見せてあげる」

本気って……。

「……。……。『エビぞり！』」

「ご、ごめん、どういう内容かよく分からない、かも……」

「……、ある女の子が旅行で人生初スキーへ。そこで見たスノボをする女性。スキーすらまともにできない女の子が目を奪われたものは、太陽を背に、真っ白い雪の照り返しによって空に浮かび上がるスノボ女性の美しいエビぞりだった。それに感動した女の子のスノ

ボ人生が今始まる」

「面白そう！」

でも『エビぞり！』っていう題名は無しかな……。怒られそうだから言わないけど！

「『ふんそうっ』」

「えーっと……」

コメントに困る……。

「紛争萌え萌えマンガ」

「それは……面白くなるのかな？」

「『せんめつ！』」

「こ、怖いよ……」

「『レンズぶ！』」

「レンズ？」

「写真部の日常を描くバトル漫画」

「バトル！？」

シャッター一つ切るのにどんな戦いがっ！

「『――ログイン――』」

「ログイン？」

「死んだ彼女がいまだにログインしている……？！　この世にいないはずの女の子を中心に進むサスペンス。最後にあなたは騙される――」

「面白そう！」

でも今話している『四文字の題名』って言うのとは少し違う気がするよ！

「『びーだま』」

「びーだま、って、あのビー玉だよね」

「ビー玉が宝石のように見えていたあの頃。ビー玉の本当の価値を知った今、それはもうただのガラス球にしか見えない。

――まるで、僕らみたいだ。毎日が輝いていた小学校、何をしてもそれは宝物の思い出になった。

――でも今は汚れてくすみ、輝きも透明感も失われたつまらない日々を過ごしている。

宝物の日々を一緒に過ごしたみんなとも自然と離れ離れになり、昨日も今日も明日も『同じ一日』で、生きることに辟易していた……。

……そんなある日、部屋の掃除をしたときにあの頃みんなで分け合ったビー玉を見つけた。

――そこから再び転がり出すガラス球の僕ら。毎日は――宝物だ」

「面白そう！」

ビー玉一つですごく膨らませたね！

「お気に召しましたかね」

「うん。とっても面白そうだね」

「そうでしょう。でも全部主人公が死にます」

「台無しだよ！？」

超展開だよ！

「というわけで、帰ったら兄コレクションの中で四文字の物を捨てようと思うんだけど」

「ええええええええ！　どういうわけか分からないし、それは少し無情だと思うよ！　お兄さん悲しんじゃうよ！」

「なに？　私に意見する気？　生意気」

「う……、そ、そう言うつもりではないですけど……。その、捨てられても、お兄さん、また買っちゃうんじゃないかな？　お金の無駄だから、捨てない方が……」

「……あの兄ならばあり得る。捨てるのはやめておいてあげよう」

「ふー。よかった」

「なんで君が安堵するの」

「え？　よかった、から、だけど……」

「……まあ、いいや」

いい事だから、安心していいんだよね？

「でも、兄コレ、いい加減にしてもらわないと家の床が抜けちゃうんだよね。さすがに三部屋目がいっぱいになるのは許せない」

「うん、それは捨ててもいいかも！」

「よし、佐藤君が捨ててもいいって言ったから捨てよう」

「あ、しまった！　コレクションが三部屋分もあるところ想像して行きすぎ感を覚えてしまってついつい無責任なこと言っちゃった！　僕そこまで責任持てないや！」

「まあ、とりあえず、捨てることは確定で」

「とりあえず捨てることを確定しないで！」

「コンビニでさ」

「え？　うん」

驚くほど急に話が変わったね。

「パスタを買ったときに、勝手にお箸を入れる店員ってなんなの？　お前は所詮日本人なんだから箸でも使ってろとでも言いたいの？」

「そんなこと言いたいわけじゃないと思うけど……。でも、それは聞いた方がいいね……。お箸で食べたらミートソースとか飛んじゃうもんね」

「そもそも、流れ作業でレジをするのが気に入らない」

「流れ作業？」

「笑顔も作らない。それどころか客の顔すら見ない。パスタに箸をつけるのもそのせいだよ。さっさと客を捌きたいから聞かずに箸を放り込んで済ませようっていう考え。終いには買ったものを落とすように袋に入れるあのデブ！　ぐっ……、思い出したら腹が立ってきた……！　あいつ、コロッケのソース忘れやがって……！」

「お、落ち着いて。ミスは、誰にでもあるよ」

「仏の顔も三度までなの。四度目は死刑だよ死刑。最低でも終身刑だよ」

「そ、それは、厳しい裁定だね……」

「『最低』だけに『裁定』って？　ちょーおもしろーい」

「え、そ、そうかな……」

えへへ。褒められたよ。

「……早くご飯食べてよ」

「え？　あ、うん」

楠さんの話が興味深くてお箸が止まっていたみたいだ。

楠さんのお弁当箱を見てみる。

空っぽだった。もう食べ終わっているみたい。

……でも、昨日はすぐに帰ったのに、なんで今日は帰らないんだろう……。あ、ううん。そんなことを考えるより先にお箸を動かそう。僕を待ってくれているんだから、早く食べ終わらなくちゃ。

箸を動かす僕と、動かすべき箸が無い楠さん。

楠さんが足を伸ばし退屈そうに空を見上げた。

「あーあ。隕石振ってきてみんな死なないかなー」

「ちょ、な、何を言ってるの？！　怖いよ？！」

「どうせ死ぬなら派手に死にたいよね。隕石なんて素敵。しかもみんないっぺんに死ぬなんて、この上なく平等だね」

「理不尽な平等だよ……」

「ま、隕石が振ってきても君だけ生き残るんだけどね」

「え、僕生き残っていいの？」

「いいよ。でもそれって幸せなのかな」

「……。幸せじゃ、無いね……」

「一人じゃ寂しいから？」

「う、ううん。僕なんかが生き残っても人類復興の役には立たないから。無力な自分が情けなくて、幸せにはなれないよ」

「ふーん。じゃあ君の好きな人と、君。二人が生き残ったら？　それって幸せ？」

「それは……もう一人の人がかわいそうだよ。僕がその人を好きだとしてもその人は僕の事嫌いだもん」

「でもいやらしいことし放題だよ。喜んでもよさそうなのに」

「い、い、いやらしい、こととか、そんな、それどころじゃないよっ。他の生き残りを探したり、安全に住めるところを探したり、忙しいよ！」

「……ふーん。君らしいっちゃ君らしいね。で、生き残った相手は、誰を想像したの？」

「え？」

真っ先に思い浮かんだのは、スカイペ相手のまりもさんだった。あ、そう言えば、最近スカイペしてないや。なんだか、怒涛の日々過ぎてパソコンつけずにすぐ寝ちゃってたっけ……。今日久しぶりに話したいな。

「まさか、私とか言うんじゃないでしょうね」

「そんな！　僕がそんな想像するなんて恐れ多すぎるよ！」
「なら有野さん？」
「有野さん、でも、ないけど……」
「なら何。どこのマッチョを思い浮かべたの」
「ぼ、僕はガチムチ好きじゃないよ……」
「嘘。パソコンの中に動画保存してたじゃない」
「それは楠さんが勝手にダウンロードした奴だよ！？　僕が好き好んで保存していたみたいに言うの止めてください！」
「私を責める暇があったらお箸を動かしなさい。いい加減教室に戻りたいんだよね。ここ暑い」
「あ、すみません」

また箸が止まっていた。
楠さんと話していると話題が尽きないなぁ。
それって、とってもすごいことだよね。
楠若菜さん。
黒髪ロングにスタイル抜群のモデル体型。パッチリお目目にまぶしく瑞々しいお肌。
世界中のだれが見ても褒める事しかできないほど完成された容姿。
美人で、勉強ができて、運動もできる。
そして――おしゃべり好きみたい。

あの不思議な感覚

僕がお弁当を食べ終えたら、楠さんはすぐに屋上を去って行った。わざわざ僕を待っていてくれたなんて、優しいね。

屋上にとどまる理由も無いので、僕も弁当箱を片付けて校舎内に戻った。

階段を下りて、下りて、下りて、教室へ向かおうと角を曲がったところで、人にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい……」

もっと注意して歩けばよかった……。

「……」

誤っても相手から何の反応も無いので、ぶつかってしまった人の顔をよく見てみる。

「う、あ……。小嶋、くん……」

昨日草むしりを手伝ってくれた小嶋君が怖い顔で僕を見下ろしていた。

「ごめんね……」

「……」

「あっ」

グイッと胸ぐらをつかみ引き寄せられ間近で睨み付けられる。

「な、なに……するの……！」

「……お前最近調子のってんじゃねえか？」

「の、のってません……！　く、くるしいよ……！」

「若菜ちゃんに気に入られてるからって調子のってっとぶん殴るからな？」

「き、気に入られてなんか、いないよ……！」

むしろ嫌われているよ！

「どうやってアドレス聞いたかしんねぇけど、自分は特別だなんて思うんじゃねえぞ？」

「思って、ません……」

「ああ？」

怖いし、苦しいよ……。

誰か助けてくれないかなと思い、あたりの様子を見てみる。みんなご飯を食べているのか、驚くほど人がいなかった。

「ご、ごめん……」

とりあえず謝る僕。

「……お前前からムカついてたんだよな。一回焼き入れとくか？」

「ひっ……。や、やめてください……！」

「なんだお前。なよなよしてマジ気持ちわりぃな。俺がその根性叩き直してやるよ」

「や、やめて……！　やめて……！」

「うるせえんだよ」

左の頬に軽いびんたをもらう。

「うぅっ！」

「なあおい。お前、殴られてもしょうがねえよな？」

「そ、そんな！」

小嶋君の右手が拳を作り肩のあたりの空間に漂う。

怖い。

怖い。

怖い。
これほどまで直接的な嫌悪は初めてだ。一切の情も含まれていない。
怖い。
夢のような、おかしな感覚。
怖い。
頭が現実として認めたくないんだ。
怖い。
僕は、固く目を瞑った。殴られたら痛いんだろうな。どこを殴られるんだろう。……どこをって、胸ぐらをつかまれた状態で顔以外のところが殴られる想像ができないね……。だから、多分顔を殴られちゃうんだろう。頬かな。鼻かな。人中を殴られるのは嫌だな。
と、諦め覚悟を決め歯を食いしばり、ドキドキしながら拳が飛んでくるのを待つ。

「お前、何ビビってんの？」

小嶋君が笑いながら言った。

「マジ情けねえ。本当に男かお前？」

「う、うう……」

「だっせえなぁ。なんか、お前みたいなクズにこんなことしてる俺がバカみたいじゃねえか」

「や、やめてください……」

「……わぁ！」

「ひっ！」

思わず目を瞑ってしまう。

「あはははは！　こいつマジだせぇ！」

それを見て小嶋君が笑う。

「うう……」

もうやめてほしい……。

「こんな奴にかまっててもしかたねえわ」

ふ、ふぅ……。どうやら飽きてくれたみたいだね……。よかった、痛い目に遭わなくて。

「まあ、むかつくから殴るんですけど」

「え！」

そんな！

また拳を構える小嶋君。い、いやだよ……！

胸ぐらをつかまれる僕と拳を構える小嶋君。

ニヤニヤしながらぐっと力を入れ、いよいよ僕が殴られるというところで――

「小嶋ぁ！　てめえ何してんだ！」

誰かの怒声が廊下に響いた。

後ろを振り向き声の方を見る小嶋君。

「げ、有野だ……」

「え、え？」

小嶋君の後ろの方から有野さんが早歩きでこちらに近づいていた。

「優大に何する気だてめぇ！」

僕と小嶋君の間に割って入ってくれて、僕の胸ぐらをつかんでいる手を引き離してくれた。そして有野さんはそのまま小嶋君と対峙するように睨み付けた。

それを見て、「別に何もする気ねえよ」と、とぼけた様子を見せる小嶋君。

「ふざけんじゃねえぞコラ……。殴ろうとしてたじゃねえか！」

「ちげえよ！　ただ遊んでただけだし！　なぁ、佐藤？」

目の前にいる有野さんを越して僕を見る小嶋君。僕は驚き、目をそらし、

「え……、う、うん……」

頷いてしまった。

情けない。

本当に、情けない。

「ま、そういうわけ。有野がキレる意味が分かんねえ」

ニヤニヤと小嶋君が有野さんに言った。

「ふざけやがって……！　お前、優大に手を出してみろ……。……
……ぶっ殺すからな……」

とてもドスの効いた声に、思わず小嶋君がひるんで一歩後ずさっていた。

「う……。だ、だから何もしようとしてねえって！　ちょっと遊んでただけだっつーの！」

「遊んでただぁ？　んなもん関係ねぇだろ……。優大が泣いてんじゃねえか……！」

な、泣いてないよ？　ほんとだよ！？　……涙目では、あるかもしれないけれど……。

「……ああ、もううぜえな！」

有野さんの威圧に負けた小嶋君が踵を返し、教室へ帰って行った。よかったなと安心して、夢の中のような頭でぼうっと小嶋君の背中を眺めていると、有野さんが振り向き僕に声をかけてくれた。

「優大」

「……え、……あ！　あ、ありがとう、助けてくれて……」

情けないよ……。男なのに女の子に助けてもらうなんて……。

有野さんは困惑しているような、悲しんでいるような顔で僕を見

ていた。二つを足して二で割った顔。

「お前、もしかして日頃からこんなことされてんのか？」

「う、ううん。そんなことないよ。今のは、僕がぶつかっちゃったから怒らせたんだと思う」

「本当か？」

「うん」

「本当に本当か？」

「うん。僕、雛ちゃんに嘘つかないよ」

僕の言葉を聞き、有野さんの顔が引きつった。怒っているのとも違う、何と言えばいいのか、嫌なことを言われたのに怒れないときの顔。

「……おい、お前、今……」

「え？」

「私のことを……なんて呼んだ……」

「……雛ちゃんのことを……ああっ！」

し、ししししまった！　雛ちゃんいや有野さんは下の名前で呼ばれることを嫌うんだった！　小学校の頃、そのことで怒られてそれがきっかけで疎遠になっていたのに、それを忘れてついつい呼んで

しまった！　朝謝ろうとしていたことを繰り返してしまうなんて僕はバカだ！　これは間違いなく怒られちゃう！　小嶋君ではなく有野さんに殴られちゃうよ！

「ごごごごめん！　その、あの、つい、昔を思い出しちゃって、つい、その、つい！」

言い訳すら出てこないよ！

「……あーっと……いや、何だ。私も優大って呼んじゃったし、その、まー、仕方ねえよ」

「……え？」

あれ？　許してくれるのかな。

「ご、ごめんね。もう、こう言うことないようにするから。もう名前で呼ばないから。気を付ける」

「あー……。……。まー、気を付けてくれ」

「う、うん」

でも、チャンスだから、色々謝ろう。でもその前にお礼だ。

「ありがとう、助けてくれて……」

「いいって。殴られなくてよかったな」

「う、うん……。本当にありがとう」

「気にすんなよ。……その、幼馴染じゃねえか」

僕のことを、幼馴染と呼んでくれた。

あの日、有野さんを怒らせてしまった僕を、幼馴染と言ってくれる。

とてもうれしかった。

「あの、ごめんね……」

「はぁ？　何が。今名前で呼んだことか？　いいって」

「あの、その、今のもそうなんだけど、ずっと前にも、同じことで怒られて、その、まだ許してもらってなかったから……。そのことも、ちゃんと謝りたいって思ってて……」

有野さんが呆れたような顔で僕から視線を外した。

「お前覚えてたのかよ……」

「え。う、うん。ずっと気になっていたから……。でも、忘れろって言うのなら忘れる」

「いや、別に忘れろとは言わねえけど……。そもそもあれは私が悪いんだ」

「そんな。僕が悪いんだよ」

「悪くねえよ。だってお前、私が怒った理由分かんねえだろ？」

「う……。う、うん……。ごめん……」

「いやいやいや。私が悪いって言ってんじゃねえか。謝るのは私の方だ。あの時怒って悪かったな。自分勝手な理由なんだ。気にすんな」

「でも……」

「でもじゃねーの。お前は悪くない。私が悪い。もっと言えば私の兄貴が悪い」

「え、え？　國人君が悪いの？」

有野國人（くにひと）。有野さんの三つ上のお兄さんだ。僕の幼馴染だった人。

「まあな。でもそれも結局は罪をなすりつけているだけで私が悪いんだけどな」

「う、うん？」

よく分からないや……。

「だから、謝らなくていいから」

「う、うん……」

なんだか、もやもやが残るけど……。

でもこれ以上謝っても気分を悪くするだけだよね。だからこの件にはもう触れないようにしよう。

頭を切り替え、もう一つのことについて謝ることにした。

「あの、朝も、ごめんね……。その、なんだか怒らせちゃって……」

僕が怒らせてしまったから有野さんは教室を出て行ったんだ。でも、なんで怒ったのか、分かっていないんだ……。申し訳ないよ……。

「……あー……。……いや、別に、優大は悪くないんだろうけど……」

「けど？」

「……まぁーそのーなんだ。あれは私の心が狭いというか、予想だにしない事実を突きつけられて動揺したっつーか。だから謝るな」

「えっ、う、うん」

謝れないなんて……。許してくれないってことかな……。

「そこでお前はなんでそんな悲しそうな顔をするんだよ」

「謝れないんだなぁって思って……」

「別に悪くないんだから謝るなって意味だからな？」

「う、うん……」

悪い僕を気遣って悪くないと言ってくれる有野さん。なんて優しいんだろう。やっぱり有野さんは昔から変わってないや。優しい人だ。

……でも、なんで楠さんに食って掛かるんだろう。やっぱり、女子の頂点を狙っているのかな……。

「あん？　何見てんだよ」

いつの間にか僕は有野さんの顔をじっと見ていたようだ。

「う、ごめん」

「いや、怒ってねえけど……。……やっぱりお前も私のこの髪の色怖いのか？」

自分の髪をつまみくりくりとひねる。

「え？　う、ううん。そんなことも、無いと、思う、かなー」

実は怖いです。

「……なら染めるか……」

「え！　やめちゃうの！？」

「嫌なんだろ？　この色」

「そ、そんなことないけど……。その、とっても似合ってるから、もったいないかなって」

近寄りがたい雰囲気を出しているけれど、僕はとても似合っていると思う。

「あれ、お前金髪が好きだったの？」

「う、ううん。そんなことも無いと思うけど、有野さんには似合ってるなって。あ、でも、僕が意見することじゃないよね」

「……まあ、そうかもだけど……。まあいいや。んで、じっと私の顔見てたけど、何か聞きたいことでもあんの？」

「あ、そうだった。その、聞いてもいいかな」

「別にいいぜ」

「ありがとう。えっと、その、有野さんって、その、楠さんの事、嫌い、なのかなーって」

「はぁ？　別に嫌ってねえけど」

「え？　そうなの？」

「そうなのって、意外なのかよ」

「あ、ううん。そうじゃなくて、その、ならなんで楠さんに、その、……えーっと、文句？を言ってるのかなぁって……」

どうやら、この質問はよくない質問らしい。有野さんの顔が怖くなった。

「……なんでお前がそんなこと気にすんだよ。お前もやっぱり若菜のことが好きなのか？」

「え、いや、そんなことないけど……」
「本当かよ……。まぁ？　お前が誰を好きになろうが？　私には、いっっっっさい関係ねぇけどな！」
「うっ、ごめん……」
「別に怒ってねえよ！　なんで謝るんだよ！」
「お、怒ってるよ……」
「怒ってねえって言ってんだろうが！　ふざけんな！」
「う……。わ、分かりました」
「……ふん」
有野さんの機嫌を損ねてしまった……。
「えーっと……」
どうしよう……。
「ごめん……」
「なんで謝るんだよ」
「……色々と、情けなくって……」
きっと、僕が普通の人なら有野さんが怒っている理由がわかるは

ずだ。でも僕はダメダメ人間だから……。有野さんが怒っている理由が分からない。生きていてすみません……。

「ごめんね……」

「……別に、悪くないんだから謝んなよ」

「……うん……ごめん」

有野さんが一度ため息をついて、すぐに笑ってくれた。
とても優しい笑顔で笑ってくれた。

「優大は優しいな」

僕は優しくなんかないよ。優しいのは有野さんだよ。

「ほんと、悪かったな」

突然、謝ってきた。意味が分からなかった。

「え、え？　なんで有野さん謝るの？」

「今までのことだよ。中学あたりから、私がお前の事避けてるみたいで気分悪かっただろ」

「え、いや、その……」

「あの時、私が理不尽に怒った理由、そろそろお前に教えなきゃいけねえよな。納得できねえよな」

「気にはなるけど、言いたくないのなら、言わなくてもいいと、思うけど」

「言うよ。教える。下らねえ理由だよ。下らなすぎてお前怒るかもしれねえな」

「怒らないよ」

「そっか。んじゃまあ、教えるわ。……あーでも、ダサすぎる理由だからここじゃあ言いたくねえな……」

有野さんが周りを見渡す。人に聞かれたらよくないのかな。

「あ、そうだ」と言って、有野さんが僕の方を見る。

「お前さ、秘密基地覚えてるか？　私と、優大と、兄貴の三人で作った秘密基地」

「うん。覚えてるよ」

今も時々行ってるからね。

「今日の放課後そこに来てくれよ。あそこなら誰にも話聞かれねえだろ」

「うん。分かった」

「んじゃあ、放課後そこで待ってろよ。……まだ残ってるかなー、秘密基地。残ってたらいいな」

「うん。そうだね」

残ってるよ。秘密基地。

「ま、適当に作ったからもうなくなってるだろうけどな」

「うん」

ちゃんと、守ってきたよ。

「思い出がのこってりゃそれだけで十分だよな」

「うん」

思い出も、秘密基地も。

僕はあの日のまま、残してるよ。

「……なんだか、少し楽しみだな」

「うん」

とっても、楽しみだね。

僕は少し、ほんの少しだけ、涙が出てきてしまった。

僕が泣いていること、有野さんにばれてないかな。

すぐ泣いたら、きっと有野さんに怒られちゃうよ。

男らしくないって。

でも、あそこであの頃の友達に会えるのは、僕にとって泣くほど嬉しいことなんだよ。

だから、これくらい許してね……。

――放課後が、待ち遠しい。

幼馴染の存在も都市伝説でしょ？　え？　違うの？

有野雛さん。

金髪セミロングで背は普通。楠さんのようにスタイルがいいわけではないけれど、それは楠さんが特別いいと言うだけで有野さんのスタイルが悪いと言いたいわけではない。細くってスレンダー。

楠さんのように身長が高いわけではないし、楠さんのように胸もあるわけではないけれど、楠さんに負けないくらい可愛い。

大きくてほにゃんとした目。潤んでいるような形のいい唇。

楠さんは近寄りがたい美しさで、有野さんは親しみやすい可愛さ。女優とアイドル、と言えばいいのかな……？　なんか違う気がする。しかも今とっても失礼なこと言っているのかも……。

とにかく、有野さんは可愛い。

僕が幼馴染だなんて申し訳ないです……、と思うほど可愛い。

美少女で、勉強ができて、運動もできる。みんなを引っ張る力を持っていて、有野さんを慕って集まってくる人も多い。女子の人気で言えば、有野さんの人気が高くて、男子の人気で言えば楠さんの人気が高い。

ただ、有野さんは好き嫌いをはっきりと言うタイプだからそれを良しとしない人は有野さんと距離をとっているみたい。そう言った点で、我が強い。

この前、きゃぴきゃぴしている女の子（語尾に☆とかついちゃいそうな人）にむかって「うぜえから普通にしゃべれよ！」と言っていたのを見たことがある。あと「缶が開けられなーい☆」って言っていた驚くほど力の弱い女の子に「なら買うんじゃねえよ！」と怒っていた。ストレートだなぁって思ったね。

でもそう言った男前なところに憧れる女の子も多いみたい。

楠さんと有野さんがクラスの女子ナンバーワンとして、その一つ下の位置にいる前橋さんは有野さんを慕っているみたいだし、有野

さんの人気は凄いね。金メダルと銅メダルを一緒に取ったみたいな感じだね。

有野さんは男勝りな性格なので、男子にも人気がある。でもちやほやされるのが嫌みたいでいつもうっとおしそうに追っ払っている。もちろん気に入らない男子には強く言葉をぶつけるので、有野さんを苦手とする男子もそれなりに多い。お昼に言い合っていた小嶋君も、有野さんのことをあまり好いてはいないようだ。

有野さん。

好き嫌いをはっきり言う人。

そして。

好き嫌いがはっきり分かれる人。

好きな人は好きだし、苦手な人は苦手。

多分、そんな感じ。

……でも、楠さんと有野さんの関係ははよく分からないや……。

楠さんは有野さんのことを嫌っていないし、有野さんも楠さんのことを嫌っていないみたい。

でも有野さんは楠さんに意見することが多いし、今朝だって楠さんが強めに怒られていた。

一見嫌いあっているように見えるのに、実はそうでもないみたい……。

よく分からないや……。

「佐藤君」

「え？」

放課後、帰ろうと荷物をまとめているところに、楠さんが話しかけてきた。

「佐藤君、今から暇でしょ？」

思わず暇だと言ってしまいそうになる笑顔。暇意外に答えが無いのではないかと思う。
いやいや。
僕は頭を振ってその考えを散らす。
「あの、僕、この後用事が……」
「え？　用事があるの？」
「うん……」
楠さんが僕だけに聞こえる小声で言う。
「……あの暇でしょうがない佐藤君に用事？　それ嘘でしょ？」
「う、嘘じゃないよ……」
「……ふーん」
ジト目で僕を見た後、やれやれといった感じでおもむろに携帯電話を開いた。
「な、なんで携帯電話を操作しているの？」
「え？　私がケータイ操作したらダメかな」
「だめじゃないけど、その、なんでこのタイミングなのかなーって思って」

「あはは。別にどんなタイミングでもいいでしょー。あーそれにしても今日は暑いね。思わず汗でケータイが滑り落ちそうだよ。そのせいでうっかりデータフォルダの中の写真が見られちゃうかもしれないね。でも暑いからしょうがないよね。――あっ、おっとっと、手からケータイが……」

と言いながらボウリングの球を投げる時のように携帯電話を構えた。

「ごめんなさい僕暇でした！」

「あ、そうなんだ。ならちょっといいかな」

笑顔で携帯をしまってくれた。ふ、ふぅ……。死ぬところだった……。

なんて安心している場合じゃない。有野さんに事情を説明しておかなきゃ。

教室を見渡し有野さんの姿を探す。

……。

い、いない……。

もしかして、もう行っちゃったのかな……。

「さぁ、佐藤君、行こう」

「え、え、あの、その前に……」

「ああ……手が汗ばんで……」

「分かりました！」

「よろしい」

僕は教室中から冷たいような熱いような視線を受けながら楠さんの後ろをついて教室を出た。

……有野さんとの約束、どうしよう……。僕、連絡先知らない……。

「あの、楠さん。僕、少し急いでて……」

僕の前を歩く楠さん。背筋がピンと伸び、腰にまで届こうという美しい黒髪が歩く度に左右に揺れる。後姿がすでに美人。追い越して顔を見た時にも美人だから街中では大変だろうね。でも今は素直に見とれることができないよ。

「なに君、まだ逃げようとしてるの？　私に刃向う権利君にはないの。ばらされたいの？」

「そんなこと、無いけど……。でも、先にしていた約束だから……守らなきゃいけないし……」

「うるさいね。ばらそうかどうしようか。よしばらそう」

「えっ、いや、ごめんなさい……」

僕どうすればいいんだろう……。

「と言っても、別にそんなに時間をとらせるわけじゃないから。ただ聞きたいことがあるだけ」

「あ、そうなんだ。でも、教室じゃあだめなの？」

「みんなに聞かれたくないし」
「聞かれたくないこと？」
「そう」
な、何だろう……。怖い……。
「……ここでいいや」
通りかかった空き教室の扉を開けた楠さん。僕もそれについて教室に入った。
「あの、一体、何？」
「お昼に話したこと。兄コレを処分しようと思って、どこかいい値段で買い取ってくれるところを教えてほしくてね。君なら何でも知ってるでしょ。オタクだから。オタクだからこそ」
「え、うん、その、まあ……」
オタクと言われることにやっぱり抵抗があるなぁ。普通の人より少し本が好きっていうくらいなのに……。
「で、高く買い取ってくれるところはどこ？　何なら君が高値で買い取ってくれてもいいけど」
「ぼ、僕そんなにお金持ってないから買い取れないよ……」

「甲斐性がないね。甲斐性がないならついでにその貧乏性も無くしてよね。さっさとお財布出して」

「か、カツアゲですか……」

「む、そんな暴力的なことするわけないでしょ、失礼なこと言わないで」

「ご、ごめんなさい……」

でも……、実際、財布出せって……。

「で、買い取り値って場所によって違うの？」

「う、うーん……。僕売ったことないから……」

「へー。そうなんだ。役に立たないね。役に立たないのならせめて命断ってよね。さっさと屋上行ってきて」

「役に立たないからって別に死なないよ！？」

「はいはいはい。我儘だねホント」

我儘じゃないよ……。

「でも、なんでそれを聞くの、教室じゃあだめだったの？」

「兄がそんな人種だってばれたくないでしょう。あ、しまった。また君に弱みを握られてしまった」

「よ、弱みって、別に楠さんが悪いわけじゃないし……。そもそも全然弱みにならないし……」

「何を言っているの。オタクが家族にいるなんて恥ずかしい事この上ないでしょう。オタクは、無いよねー」

「う……」

楠さんは、僕のこともオタクっていうから、何気に僕も否定されていることになるね……。

「いいところ知らないのなら、せめて古本屋の場所を何個か教えて」

「う、うん」

これなら、すぐに秘密基地へ向かえるね。

知る限りの古本屋を紙に書き記し楠さんに渡す。

「へぇ。結構あるんだね。さすが佐藤君。この中から兄コレを売る店を探せばいいんだね」

「う、うん……。でも、お兄さんのコレクション本当に捨てちゃうの？」

「君が捨てろって言ったんでしょ」

「え、いや僕捨てろなんて言ってないよ！？」

「はいはい。じゃあ、とりあえず佐藤君の命令通り泣きながら兄コレを捨てに行ってきます」

「完全に僕のせいにしようとしてる！」

「不肖楠若菜。佐藤君の命により兄の宝物を捨てに行ってまいります。では」

「え、あっ、ちょっと……」

行っちゃった……。ぼ、僕のせいかな……。……僕のせいだよね……。ゴメンねお兄さん……。

「うう……。また僕のせいで不幸な人が……」

ごめんなさい……。

「……はっ。落ち込んでいる場合ではない。早く秘密基地へ行かねば」

落ち込む時間はたくさんあるからね。

「よし、早く行こう」

少し急ぎ足で教室を出た。

急ごう！

と、思ったのだけれども。

う……。まずいよ……。

「おお、佐藤。ちょうどいいところに。もう帰ったかと思ってたぞ」

廊下の角で、先生に会ってしまった……。また仕事を頼まれちゃ

うのかな……。

「この前片付けた資料室に資料が山積みされて置いてあるから、それを本棚にしまっていって欲しいんだ」

「あの、その……、僕、用事があって……」

「またお前は……。すぐそうやって逃げようとするなぁ！　さっさと終わらせればすぐに帰れるんだから、文句を言う前に早く仕事をはじめろ！」

「は、はい……」

うう……。早く終わらせよう……。

……。

・

・

・

……。

「うわぁ！　時間とられちゃったよ！」

一時間弱資料室に縛り付けられ完全に遅刻してしまった僕。まだいてくれるかな……。当然怒ってるよね……。

ごめんね……。

山を駆け上る僕。でも体力がないのですぐに息切れして足が止まる。

急ぎたいのに。
情けないよ……。
体力つけなきゃね……。

「あ、有野さんは……」

全力で歩いてやっとたどり着いた秘密基地。
そこには誰の姿も無かった。
ただ、いつもと変わらない秘密テントだけが寂しそうに僕を迎えてくれた。

「う、ご、ごめん……」

何もない。誰もいない。
木の間から漏れる陽のスポットライトが僕を寂しげに照らす。

「な、殴られる……。絶対殴られるよ……」

昔を思い出すよ……。よく殴られていたっけ。

「でも、そんなことより、早く謝りに行かなきゃ……。殴られちゃう」

僕は踵を返し来た道を引き返そうと一歩踏み出した。けど、

「まてまて」

秘密テントの中から声がした。

「帰ってねえよ」

テントから出てきたのは当然有野さん。
にこやかに手を挙げてくれた。
「あ、有野さん！　ごめんね！」
僕は駆け寄り頭を下げた。
「別に怒ってねえよ。時間決めてねえし、優大の放課後の予定聞いてなかったし。それにたった一時間じゃねえか。来なかったらムカつくけど来てんだから文句はねえよ。でも、そんなことより、殴られるってなんだよそれ。私がいつお前のことを殴ったよ」
「え、主に、小学生時代に……」
「……忘れとけよ」
体に刻み込まれていますので……。
「あの、待たせちゃってごめんね……」
「構わねえっての。どうせお前また誰かに捕まってたんだろ」
「えっと……」
「あー、言わなくていい言わなくていい。別に聞きたいわけじゃねえし」
「う、うん」

よかった。聞かれたら理由を言わなきゃいけないところだった。
「にしても、この秘密基地がまだ残ってるとはなぁ。風で吹き飛んでると思ったんだけどなぁ……」
「うん」
「あの頃を思い出すな。昔はあんなに大きく見えた秘密基地も今見れば狭くて汚ねぇぜ。それに造りが雑。ホント、よく残っててくれたな」
「うん」
「……毎日のようにここへ来て遊んだな……。懐かしい」
「そうだね」
「……でも、それも私が理不尽にキレたせいで、終わっちまった」
「……」
ここで遊んでいるときに怒られた。
『今度から私の名前を呼ぶんじゃねえぞ！』って。
その理由を、今日教えてくれるみたい。ずっと引っかかっていた胸のしこり。それが今日無くなるんだ。
「悪かったな。キレて」
「う、ううん」

「ああ、いや、そうだな。とりあえず、理由しりてえよな」

「あ、うん」

いよいよ聞ける。

「大した理由じゃねえんだけどさ、あのー、私の兄貴がさ、ああなったじゃん？」

「うん」

ああなった。

有野さんのお兄さん、國人（くにひと）君は、中学校に上がったあたりから、突然非行に走りだした。髪の毛を金色に染め、平気でタバコを吸い、毎日喧嘩に明け暮れた。もちろん、僕と遊ぶなんてことはもうなくなっていた。

この辺りでは有名だ。とても喧嘩が強くて、目が合っただけでぼこぼこに殴られる。とても恐れられていた。

みんなから怖がられていた。それは、当然僕も……。

でも、実は憧れてもいた。

強くて、かっこよくて、自分の腕だけで生きていくような、そんな僕とは正反対のアウトローな生き方に憧れを抱いていた。

しかし憧れるだけ。

僕には、そんなことできるわけがなかった……。

國人君が荒れだしてから、有野さんも徐々にその影響を受けだした。

國人君のように、非行の道を歩き出した。

それからしばらくしてだった。

僕が有野さんに怒られたのは。

『名前を呼ぶな』と怒られ、それから疎遠になってしまった。

悲しかった。幼馴染が、二人とも僕の元から離れて行ったのは。
そこから僕は一人になった。
そこからずっと、僕は一人だった。
そこから――色々と決まったんだと思う。

「だせぇことに、兄貴の影響で私もこんなんになっちまってさ」

「……う、うん……」

「まあ、なんだ。あの当時、兄貴の真似をして、調子に乗ってた私はさ、その……」

「うん」

「……あの当時の話だからな？　今は違うからな？」

「う、うん」

「……えーっと、言い辛いんだけどさ、あー……その、優大の事……だせえと思ってたんだよ」

「うん」

それは今もそうだよ？

「当時だからな！　今はそんなこと思ってねえからな！」

「え、う、うん……？」

今もかっこ悪いけど……。

「んで！　でだ！　……その、私の名前ってさ、今の私には似合わねえじゃん？」

「え？　なんで？」

「なんでって、似合わねえだろ。『ヒナ』だぜ。雛。こんな女っぽい名前、可愛い奴にしか似合わねえだろ」

「え、そうかな……。有野さんにはとっても似合ってると思うけど……」

「……。……似合ってるって、それお前……！」

突然顔を赤くして僕をべしべし叩いてきた。

「いたい！　ご、ごめん！」

「て、てめえ！　この野郎！」

「ゴメンなさい！」

僕が悪いです！

「はぁー……はぁー……」

い、息が荒いよ……。顔も赤いし、怒らせてしまったみたいだね……。

「ご、ごめんなさい……」

「……べ、別に、怒ってねえけど……」

え、怒ってないのに叩かれたの？　僕……。

「い、今はそんなのいい！　そんなことよりあの日のことだ！」

「あ、はい」

「私は、自分の名前が恥ずかしかったんだよ。こんな女っぽい名前嫌だって思ってたんだ。そんで、更に、だせぇと思ってた優大に『雛ちゃん』なんて呼ばれるのが我慢ならなかったんだ」

「そうだったんだ……」

「だから私はあの日、お前にキレたんだ。『今後名前を呼ぶな』って……。今思えば、なんて理不尽な奴なんだろうな、私。ホント悪かった」

「そ、そんな。嫌なことしたのは僕なんだから謝るのは僕だよ！」

「私が理不尽だったって言ってんだろ。それは譲れねえよ。お前は謝るなよ」

「……でも……」

「でもじゃねえの。私が悪かった。……許してくれ」

「う、うん。許すもなにも、僕怒ってないし……」

「……そっか。そう言えばお前はそういう奴だよな」

そういう奴って、どういう奴だろう……。よく分からないや。

「でさ、お前にキレてから、どうにも雛って名前が嫌いになっちまってさ。誰に呼ばれてもイライラするようになってたんだよ」

「うん……」

可愛いのに……。

「まあ、今思えばしょうもねえことなんだけどな。なんでそんなこと気にしてたんだろうって、馬鹿みたいだぜ」

今思えば馬鹿みたい、と言うことは？

「えっと、なら、今はもう名前で呼んでもいいの？」

「いやー、なんかもう恥ずかしいわ。イラつくことはねえけど、恥ずかしさは残ってるんだよ。……だって、似合ってねえもん」

「そんなことないよ。似合ってるよ」

「……そっか」

にっこりと笑ってくれた。

あの頃から何も変わってない、優しい顔だ。

と、思って懐かしんでいたのだけれども、急に恥ずかしそうに僕から顔をそむけ、もごもごと言った。

「ま、まあ、何だ。お前が、呼びたいって言うんなら、その、なぁ。別に、呼んでも、いい、かなーとか……」

「……え！　いいの？！」

「あ、いや、無理にとは言わねえけど、どうしても、呼びてえなって思うんなら、我慢してやらないことも、ない」

やったね！

「嬉しいな！　僕、あの頃みたいに呼びたいよ！」

「え、その……。……まあ……お前がそうしたいのなら……、私も、悪かったし。迷惑かけてきたし」

「迷惑なんてかけられてないよ。でも、僕、雛ちゃんって呼びたい」

あの頃にはもう戻れないのなら。
呼び方だけでも、戻したいよ。

「呼んでも……いい、かな……？」

「ぐっ……！」

完全に僕から目を背け、顔を隠した。やっぱり、嫌なのかな。
顔を背けたまま、有野さんが言う。

「……こほん……。……なら、しょうがねえな。好きに呼べばいい」

「やった！　ありがとう、雛ちゃん！」

やっぱり、少し嫌なのか、耳が真っ赤になっていた。お、怒ってるのかな？

「……くそ……そんな嬉しそうに……ふざけやがって……」

「え、ご、ごめんなさい……」

嬉しそうに呼んだらダメなのかな……。

赤い顔を僕に向ける。

「ち、ちげえよ！　ふざけてんのは私だ！　今更こんなこと、なぁ！」

「え、よ、よく分からない、けど……」

今更名前で呼び合うことがおかしいって言いたいのかな？　僕は全然おかしいとは思わないけど。

あたふたとしていた有野さん……、いや、雛ちゃんが我に返り、コホンと一度咳をつき仕切り直して僕の顔を見る。

「私も、お前の事優大って呼ぶからな」

「うん」

僕らは笑顔を見せ合った。

「あの頃に、戻ったみたいだな」

「うん。……ここに、國人君がいれば、完璧だね」

「……兄貴がここにいれば……か」

雛ちゃんの笑顔に影が落ちる。

「え、え？　國人君に、何かあったの……？」

「……あいつは、もうここへ来れねえよ……」

「それは、ここに来たくないからってこと？」

「……そうじゃねえ。そうじゃねえんだよ。来たくても……来れねえと思う」

「どう、して……？」

そう言えば、最近は全く噂を聞かない。あれだけ街で噂されていた國人君だったのに、ここ二年くらい何も聞いていない……。な、なにかあったのかな……。

「兄貴の話は今はいい。……でも、多分、近いうちに……事情を説明する……」

「う、うん……」

……なんだか、嫌なことが起きているみたいだ。でも、近いうちに教えてくれるというのであれば。これ以上僕が踏み込むのはよくないよね。

「で、だ」

改めて雛ちゃんが僕の顔を見る。

「うん？」

「その、昔に戻った私達なんだけどさ」

「うん」

また雛ちゃんの顔が赤くなった。

お、怒ったのかな？

「……もうちょっと、先へ進んでみるのも、面白いんじゃねえかなって思ったり思わなかったりしたりしたりなんだり」

「え？　どういうこと？」

「いや、だから、幼馴染の、先……、と言えばいいのか、よく、わかんねえけど……。もうちょっと、踏み込んだ、関係……？　っていうか、なんていうか……」

「……幼馴染の先って……あっ！」

分かった！

「そ、そう言う、こと、何だよね……」

「え！　い、いや、その、なぁ！　面白いかもなぁって、思っただけだぜ！　そう、実験的に。実験的にな？　してみたら面白いかもなって！　思いつき思いつき！　お前が嫌なら別に、このままでも

いいし？　冗談、ってことでも、いいし……。……ってゆーか、冗談だし！」

「え？！　冗談なの？！　僕とっても嬉しかったのに……」

「……え？！　嬉しい！？　嬉しいって言ったのか？！　え、え？！　マジで！？　いや、なら冗談じゃなくてもいいし？！」

「えっと……僕は、冗談じゃない方がいいな……」

「冗談じゃねえよ！」

「ひっ……。じょ、冗談じゃない、よね……、ごめんね……。僕調子のってた……」

怒られた！　ごめんなさい！

「は、はぁ？！　お前何突然……あっ！　いや、今の冗談じゃねえって言うのは、ふざけんじゃねえって意味じゃなくって、その、今言った提案が本気だってことだ！　キレたんじゃねえよ？！」

「あ、あぁーなるほど。勘違いしちゃった」

「そうだぜ！　優大勘違いしちゃってたな！　あはははは！」

「う、うん」

……。なんだか、おかしいなぁ、雛ちゃん。

「えーっと、な、なら……。その、今から、そう言う関係ってこと

で、いいのか？」

不安そうに聞いてくる雛ちゃん。何が不安なのか分からない。僕が断るわけないのに！

「うん！　もちろんだよ！　これからよろしくね！」

一気に、雛ちゃんの笑顔が弾けた。とっても嬉しそうだ。嬉しいのは僕なのに。

「……は、はは……。ははは。……い、いやぁ、その……なんか悪いな……。私みたいなので……」

「そんな！　雛ちゃんだから、僕は嬉しいんだよ！」

「そ、そんなこと言うなよぉお前っ！　照れるじゃねえかっ！」

雛ちゃんも喜んでくれている。とっても嬉しいよ！

「僕、雛ちゃんが初めてだよ」

「そ、そうなのか！　あ、あはははは！　なぁ！　おい！」

「うん！　初めての親友だよ！」

「……

……

……

……

……

……は？」

……え。

さっきまで喜んでいた雛ちゃんが、突然無の顔になった。

こんなにも人の顔って無を表現できるんだ。無過ぎて少し心配になっちゃうよ。

「ひ、雛ちゃん。もしかして、僕、全然違うこと言ってた？」

「あはははははははは」

かくかくと笑う。無です。無の状態で笑うと、こうなるんだね。

「ご、ごめんね！　勘違いしちゃった！」

「……いや、はっきり言わない私が悪いんだけど……。なんて言うか、お前らしすぎるというか、ベタすぎるというか」

「ごめん……」

無の顔をやめ、あきれたような顔で僕を見てきた。

「謝るなよ……。勘違いは、誰にでもある……」

落ち込みまくりの雛ちゃん。ごめんね、ごめんね。一体どういう意味だったのだろう……。

「その……、今のは、本当は、どういう、意味だったの？」

「ああ、しょうがねえよ。私がはっきり言わなかったのが悪いんだもんな。ああ、私が悪い」

「そ、そんなことないよ。僕が、馬鹿だから」

「お前はバカじゃねえよ。バカは私だ。こうなりそうだってことは予想ついてたんだ。はっきり言わない私が悪い」

「え、っと……」

「……だから、はっきりと言うわ」

「え、あ、うん」

「……うっし」

雛ちゃんが、気合を入れた。

覚悟を決めた、かっこいい顔で僕の顔をまっすぐに見てくる。

「……私は、優大のことが、す――」

と、ここでタイミング悪く誰かの携帯電話が鳴った。電話みたいだよ。

……。あああああああああああああああ！　僕のポケットから聞こえてくる！　っていうか僕だ！

「う、あ、あ、あ、ゴメンなさい……！　その、僕、マナーモードにし忘れてた……！」

「……いや、別にマナーにしてないのは悪い事じゃねえだろ。いいから、さっさと出ろよ。話はそのあとだ」

「う、うん、ごめんね、ちょっと、失礼して……」

ポケットから携帯電話を取り出しディスプレイを見てみる。

「？」

知らない番号だった。でもなり続けるので出てみる。

「はいもしもし。どなたですか？」

『……なんで私は君の番号を知っているのに君は私の番号を知らないの？』

この可愛い声ときつい口調は……。

「え、あ、楠さん？」

「若菜だぁ？！」

「えっと、僕、携帯番号は教えてもらってないけど……」

メールしか受け取ってないよ。

『嘘。どうせ君、私の番号を調べて登録してあるんでしょ？』

「そ、そんな。僕そんなことしないよ……」

『どうだか……。ま、いいや。私から電話をかけたことによって君が調べていようが調べていまいが番号が知られてしまったわけだし、変わらないね』

「そ、そうだね。それで、その、いったい僕なんかに何の用事が……」

『私じゃないんだけどね。兄が君に言いたいことがあるってうるさいから』

「え！　ま、まさか、本売ったの？！」

『売れって言ったのは君でしょ』

「言ってないよ？！」

『うるさいね君。往生際が悪いよ。売れって言ったのは君。認めてよ』

「み、認められないよ……」

『……レイプ未遂……』

「ぼぼぼぼ僕が言いましたあああああ！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

なんだかどんどん罪が重くなっているよ?！

『でも私は謝らなければならないの……』

「え、え?」

『未遂犯の君に命じられた兄のコレクションの処分、それも未遂に終わってしまったの』

「え、あ、よかった……」

失敗したみたいだね……よかった。

『出張買取してもらおうと思ったんだけど、査定中に兄が帰ってきてしまってね。理不尽に怒られたよ。そしてその言い訳として君に命令されたと言ったら、君に電話しろと。兄に代わるね』

「え！?」

そんな突然代わられても！　僕が怒られちゃうの?！

『……もしもし?』

「あ、はい！　その、僕……！」

『いやいや、そんなに恐縮しないで……。俺は、全部分かってるから』

「え……」

怒鳴られると思っていたけれど、全然そんなことは無くむしろ優しさと憐みのこもった声だった。

『君、若菜の本性を知っているみたいだし、きっと無理やり言わされたんだろう？』

「えっと……その……」

『みなまで言わなくていいよ。大丈夫。俺は君の味方だから』

「は、はぁ……」

『これからは部屋に鍵をかけることにするから。安心していいよ。もう勝手に処分されることは無い』

「そ、そう、ですか……」

『じゃあ、若菜を恐れる者同士、仲良くしよう』

「は、はい」

『じゃあね。いつか愚痴りあおう』

「えっと、はい……」

お兄さん、優しい人だね……。

『……もしもし？』

「あ、楠さん……」

楠さんに代わっていた。え、いや、お兄さんも楠さんだけど……。

……とにかく、楠さんに代わっていた。

『ふざけた会話の内容だったね。何が私を恐れている者同士よ。それはこっちのセリフだよ。恐れているのは私の方だよ。被害者面しないでよね』

「は、はい、すみません」

『……ふん。まあ、そう言うわけで、君の作戦は失敗に終わりました。ここにご報告させていただきます』

「はい……」

『では失礼します。また明日』

「うん、ばいばい」

電話が切れた。

よかった、お兄さんのコレクションが葬り去られないで……。

って、そんなことよりも！

「あ、ご、ごめん雛ちゃん。話の途中で電話なんかに出ちゃって……。……これで、もう大丈夫。電源切ったよ。それで、何の話だっけ」

うぐ……。雛ちゃん、怒っているのかとても怖い顔。……電話に出ちゃったから怒ってるのかな……。

「……お前、若菜の電話番号も知ってんだな」

「え、あ、うん……」

「しかも、若菜から電話がかかってくるんだな」

「う、うん。初めてだけど……」

「……」

ぎろりと睨み付けてくる雛ちゃん。

う、怖い……。

「その……」

「……話ってのはあれだよ。私達、しんゆうになったんだから、とりあえずアドレス交換しようぜって言おうとしてただけ」

「え、あれ、親友になろうっていうのは僕の勘違いじゃなかったの？」

「勘違いじゃねーよ。初めからそれ以外言うつもりなかった。なんだ？　それ以外に何かあるのか？　ねえよな。あるわけねえよな！

えぇ？　おい！」

「そ、そうでございます……」

怖いよ……。

「……なんだよ……くそ……」

「え、え？」

とても悔しがっていた……。

「てめえ、いいから、さっさと教えろよ。早く帰りてえんだよ」

「あ、うん。ごめん」

「……ふん」

突然機嫌の悪くなった雛ちゃんと、アドレスの交換をしたあと、雛ちゃんが一人さっさと山を下りて行った。

一人取り残された僕は、雛ちゃんを怒らせてしまったと困惑し立ち尽くしていたけれど、山を下りて行った雛ちゃんから送られてきたメールを見てほっと息を吐いた。

『また明日な』

なんてことは無いメールだったけれども、今の僕にはこれだけでとっても安心できた。

あの頃、別れる時に言ってくれていたこの言葉。

この言葉の次の日は、ちゃんと笑いあえていたから。

……また明日。

僕は、声には出していないけれど、思いを込めて、メールに乗せて送った。

なんだかとっても、ノスタルジー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8722x/

キョーハク少女

2011年11月8日01時04分発行